明治四十四年二月二十日發行

婦人衛生雜誌

第二百五十五號

婦人衛生雜誌

第二百五拾五號目次

總會及創立二十五年祝賀會豫報

來る三月十八日（第三土曜日）をトし本會總會擧行の豫定に之有候處本年は恰も本會創立二十五年に相當り候に付き右記念祝賀會を兼ね總會及懇親會相開き候間豫め御了承相成度此段稟告致候也

會場　小石川區砲兵工廠內後樂園

時日　三月十八日午後一時ヨリ

尙詳細の事は追て御報可申上候

明治四十四年二月

私立大日本婦人衞生會

婦人衛生雜誌第二百五十五號
（明治四十四年二月二十日發行）

講演

壽命の話

ドクトル　富士川游

先頃から度々、身體のことの御話を致して居りましたけれども最早このことに就て申上げることは殆んど濟みましたから、今日は身體を引くるめて、壽命のことを少しく御話を致す積りでございます。

皆様も御承知の通り、人間といふものはどうしても一度は死なゝければ成らぬやうになつて居るのでございます、若し人間が何萬年たつても死ぬことが出來ないと云ふことに成りますと、此位苦痛なことは無いのでありまして、宜い加減の時に死ぬやうな都合になつて居るのは天の命とでも申しませうか、しかしその宜い加減の時と云ふのが一向分らないので何時頃死んで宜いか少しも分らぬのでございます。

今からざつと四百年程前に、英吉利のヨークシヤイヤと云ふ所で百六十九まで生きた人がある、是が世界で年齢が能く分つて居ります中で一番長く生きた人であります、西洋の暦で千五百〇一年に生れまして千六百七十年に死にました、丁度百六十九まで生きて居つたのであります、職業は漁師であつて、誠に賤しい生活をして居つた人でありますが、或時に百四十年程前の事を聞く必要があつたので、裁判所に呼出した所が、二人の子供を連れて來た、所がその子供は兄が百二歳で弟が丁度百歳であつたといふことであります。我國にも三浦の大助とか竹内宿禰とか色々年を老つた人もありますけれども、それ等はハッキリ分つて居ない、ハッキリ分つて居るのでは今申したヨークシヤイアと云ふ所のジエンキン

スと申す人であります、モウ一人は英吉利のシユロプシャイアパーレと云ふ人でありますが、此人は百三十までは百姓をして働いて居つた、所がそれを王樣が聞いて大變に珍らしがつて、態々倫敦へ呼寄せられた所が間もなく百五十二で死にました、其時に有名なハーヴエーと云ふ大醫が解剖をして見ました所が、其人の身體は何處も惡くなつて居ない、殊に年を老りまして死ぬのは屹度心臟が惡くなつて居るのであるが、此人のは少しも惡くなつて居ない、其處で此人は百姓をして働いて居つたのを、王樣の御召で倫敦へ來て急に贅澤な生活をした爲に死んだのであると云ふことであつた。

で斯う云ふやうに百六十とか百五十とか云ふ、殆んど信用の出來ない位に年を老つて生きて居るのは男子と婦人と何方に多いかと云ふと、婦人の方が非常に多いのであります、それからどう云ふやうな人がかういふ風に、長生をして居るかと申しますと、種種な人が長生をして居る、前に申したジエンキンスは漁師をして、パーレは百姓をして居つた、又獨逸の人で、元佛蘭西領のロートリンゲンと云ふ所の外科醫者でポリチマンといふ人は百四十二まで生きて、百三十頃まで醫者をしてドンドン驅廻つたといふことである、此人は大變に酒が好きで殆んど酒に飮まれると云ふ位に酒を飮んだ、それでも百四十二歳まで生きました、今度は婦人でございますが、是も獨逸と露西亞の境のザプヤンの人でエリザベス、ドリウといふ婦人はコーヒーを非常に好いて、毎日コーヒーを四十杯位づゝ飮んだが、矢張百十四歳まで生きたさうでございます、であるから酒を飮めば長生が出來ぬとかコーヒーを飮めば長生をせぬとかといふことはないので、長生をする人はどんな事をしても長生をするのである。

それから、背の高いと低いといふことは、長生することには關係がない。非常に高い人が長生をしたのは、英吉利の北の方のスコツトランドの人でワツトソンと云ふ人で、この人は百十五まで生きて居て死

ぬまで働いて居つた、この人の身長は獨逸の尺で七フートでありますから、日本の尺にすると丁度七尺幾らになりませう、斯樣な大きな人が長生をして居るかと思ふと、同じ英吉利のアイルランドのドナルと云ふ人は身の丈が僅か二尺であつたといふことであるが此人も餘程長く生きて百十五歳で死んだと云ふことであります。

右のやうな次第で、背の低い人でも、高い人でも、酒を飲む人でも、コーヒーを四十杯も飲む人でも、長生をすることが出來る。

今まで御話したのは著しい例を擧げたのでありますが、これから是等の人はどう云ふ譯で、長生をしたかと云ふことを、一寸調べて見たいと思ひますが先づ我國の長生をした人はどうかと云ふと、是は明治三十二年から明治三十八年までの調べであります(附指示)此赤い線は男子であります、日本の國にはどの位の人口があるかと云ふ調べもありませぬし、此年度に何人子供が生れたかと云ふ調べもまだ著いて居りませぬけれども、死んだ人の調べは能く分つて居る、此表は死んだ人を調べたのでございます、それで百歳のを申しますと人の數が甚だ少なく成りますが、三十二年から三十八年までに百歳で死んだ人は男子が百一人で婦人が二百三十一人、それから百一歳になると男子が五十九人に婦人が百三十一人是までは男子も婦人も餘り違はぬのでありますが、百二歳になると婦人が六十三人に男子が十四人、百三歳には婦人が十七人に男子が一人も無かつた、百拾歳と云ふと婦人に一人あります、男子には百八歳に一人あるばかりで其外には一人もない、之を勘定して見ると多く婦人の方が長生をして居ります、西洋の調べも皆な是と同じでございます。

斯う云ふやうに、第一に婦人方が著しく長生をするといふ事實があるから、其譯を十分に研究して見ましたならば、長生の出來る譯が分るに違ひないと思ひます、それならば何から研究を致すかと申しますと、第一に生れてから百歳までの間に、何時でも

人間はどういふ具合に死ぬものであるかと云ふことを調べて見なければなりませぬ、所がそれ等のことをしらべて見ますと、其處に一つの規定がございます、それは生れた時には非常に男子が餘計でありますけれども、一年の間に大變に多く死んで仕舞ふ、さうして二年目には大方女の子と男の子の數が同じやうになる、それから十四五になると女の人の死方が多くなつて來て、二十歳前後になると婦人が非常に死ぬ、さうして三十から後になりますと男子の方が澤山死んで、女子の方が長く殘つて居るのであります、それならば何故婦人が長生をするのは女が身體が男より強いかといふことになるが、女の身體が男よりも強いと云ふことは言へない小供の時に、男の子が弱いから能く死ぬかと云ふと、さうぢやア無い、其證據に或病氣になると非常に女の子の餘計に罹る場合がある、又或病氣になると女の病人が少ない場合がある、百日咳と云ふものは、どう云ふ譯であるか大きく成つても小さい中でも、婦人の方は之に罹るものが多い、又後になりますと、五六歳から：：主に著しいのは十三四から二十までの間に、女の子供が男の子供の數倍多く死ぬ、それであるから女の子供が身體が強いと云ふことは言へない、併し婦人の身體は男子の身體に較べて見ると、何處か都合が能く出來て居ると見えて小さい中には餘り死なゝい、それで年の上から考へて見ますと云ふと、此年齡に依て病氣にかゝる機會が多い時と少ない時とある、生れてから一年の間は男の子供に氣を注ける、十二三から二十位までは女の子供が死ぬから女の子供に注意する、それから先は男も女も同じである。

それから大體、人間は普通、どの位生きるかと云ふと古昔から人生五十と云ふことがありますけれども、これは何を標準としたのか知りませぬ、統計の上で、人間の平均の壽命を調べて見ますと、これは各年齡によつて差異があります、例へば三十であればそれから先どの位の壽命があるかと云ふと、先づ

三十四年と五分、三十五であれば其先が三十年と八分、二十であれば四十三年と一分、それから二十五の人であれば三十八年と八分、四十歳になると後は先づ二十六年位よりない、五十歳になると後は十六年ばかりになる、これは健康の人を一萬人集めまして、今年何人死ぬか其次の年は何人死ぬかと云ふやうに、其死んだ數を勘定して行きまして、さうして其數から割出したのであつて、保險會社の如きも皆な此表に依つてやつて居るのであります、是は獨逸の調べでありまして、我國の調べは少し是より少ないけれども大體同じことである。

それで二十歳までは男でも女でも、年齢に依つて死ぬべき病氣にかゝる機會の多い場合に氣を注ける、此事は長生をするに第一の要點であらうと思ひますモウ一つ婦人の身體が男子のに較べて、決して強くないと云ふ例を申上げませう、それは病氣に對しては婦人の身體は何時でも強い、男子には罹る場合でも婦人の方は罹らない、しかし一旦病氣にかゝると男子よりも長く煩ふのが常であります、又仕事をさせると婦人の方は直に勞れて仕舞ふ、獨逸の郵便局で婦人を使ひまして、それに郵便電信の事務を取扱はせました所が、神經衰弱であるとか何であるとか種々な故障が出來て、迚も事業を長くやることが出來ないので非常に弱つて居る、是に由て觀ても婦人の身體が男子より強いと云ふことは言へない。

それから家族の歷史を調べて見ますと、長生をする著しい例がある、親が長生をすれば其子供や兄弟が長生をすると云ふことは、素人でも誰でも知つて居ることでありますけれども、其人が前に種々な病氣に罹つて居りますと云ふと、どうも長生をすることは難かしいやうである、又住んで居る場所が惡いと是も長生が出來ない、併し都會が惡いと云ふ譯では決してない、都に住む者が長生が出來ないで、田舍に住んで居る者ばかりが長生が出來ると云ふのではない、今日のやうに都會の衞生が非常に進んで、都會の整理が十分に出來ますと却つて田舍よりも宜

い位である、今日の日本はまださうではありませぬけれども、英吉利の倫敦であるとか、獨逸の伯林であるとか云ふ所は、都會の方が田舍より人の死亡が少ない、さうでありますから都會でも田舍でも構はない、唯衞生に適つた場所であれば長生をするに都合が宜い。

それから職業の如何であるとか、金が澤山あるとか無いとか云ふことは、長生に餘程大きな關係を有つて居るのであります、非常に酒を飲み茶を飲みコーヒーを飲むと云ふことは、長生をするたちの人は差支へないでありませうけれども、普通の人にはそれでは長生が出來ない、勿論是だけを調べたのでは、どうして長生をするかと云ふことは本統に分らないそれは不養生をしないで氣を樂にして、宜い衣服を著て旨い物を喰つて居れば長生をするといふことは誰でも言ふことでありますけれども、さうして居つて長生をしない人が多いからそれだけでは分らない。

其處で更に進むで詳しく調べて見ますと云ふと、その人の體質と云ふものが長生をするのに非常な關係を有つて居るのでございます、體質と申しますのは人間の身體を外から見た體格、筋力、顏貌などを引くるめて、體質と申して居ります、外から見たところで申しますと卒中の體格であるとか、肺癆の體格であるとか申しまして、非常に顏が赤くつて卒中でも起しさうな身體を卒中體格と言ひ、非常に瘦せた人で肺病にでも成りさうな人を肺癆體格と申します、斯う云ふやうに外から見た所と、身體の中の構造とを一緒にしまして、之を體質と申すのでございます、身體の出來と云ふものが長生をすることに大變に關係がある、吾々の體質と云ふものはどうして出來て居るか、或はどうなつて居るかと云ふことは今日申上げる暇がありませぬが、先づ體格から申しますと、全體に於て人間の體格は年々良くなつて參ります、學者の中でも樣々のことを言ふ人があつて、漸々昔の人は非常に大きな人間であつたけれども、

人間の身體が小さくなつて來た、其證據には昔の鎧は皆な大きかつたと云ふ人がありますが、今でもアノ鎧の著られないやうな人は澤山ある。

古い御話をするやうでありますけれども、今から二千年程前の亞弗利加の埃及人は、御承知の通り人が死にますとミイラにして取つて置いたのであります、人が死にましても其魂が三千年程經ちますと又歸つて來ると云ふ說を信じまして、死にますと墓に入れないでミイラにして置いた、それに依て今から二千年位前の身體を見ることが出來ます、其埃及のミイラを調べて見ますと云ふと、今日の西洋の人よりは皆な小さいといふことであります、丈は大概百六十センチメートル位で吾々の身體と少しも違はない、一米半と少しですから五尺一寸位でございます、それから獨逸と佛蘭西の境に今よりモウ一つ前の人間の居つた所がありまして、其處から五百ばかり人身を掘出しました、其中に男が四百幾つに女が百六十幾つあつたと申します、それは今から六千年も前のでありますが、百七十センチメートルと云ふやうな大きいのは出て來ない是も六尺に足りないのでございます、日本の人は小さいのでありますけれども、それでも是よりはまだ大きい、さうですから漸々人間が小さくなると云ふことは無論ないのであります。

しかし人間の丈と云ふものは先刻も御話した通り、壽命には直接の關係がない、背の高い人だけが長生をしたといふことではない、であるから丈が短いと云つて心配する事はない（笑聲起る）、併し身長と重量との關係が旨く往つて居ないといけない、身體の丈を度つて見てそれを佛蘭西の一仙米に割當て、其一センチメートルに對して身體の重量が幾らなければ成らぬと云ふことがある、それから又身體の丈の半分だけ胸の周圍がなくてはいけない、それが多くても少なくても其人の身體は工合が惡いといふやうなことがある、併し唯丈の高い低いと云ふことだけでは長生には少しも關係がない。

次には身體の色澤でございます、是は餘程長生をすることに關係して居る、先づ顏の色についていひますと、顏の色の蒼い人の罹ります病氣は結核に老衰、癌、腎臟病、消化器病などであつて、顏の色の赤い方は脂肪、酒毒、僂麻質斯、心臟病、腎臟病、卒中などに罹ります。

それから瘦せた人に肥えた人、强ち瘦せた人が蒼くつて肥えた人が赤いと云ふ譯もありませぬが、しかし普通には瘦せた人は蒼くつて、肥えた人が赤い、瘦せた人には結核、肋膜炎、老衰、氣管支炎、肺炎、癌などゝ云ふ病氣が多く、肥えた人は脂肪、糖尿病、卒中、心臟病、腎臟病、僂麻質斯、神經病などゝ云ふ病氣が多いといふことになつて居る歐羅巴のシワイツのバーゼルの保險會社で、七千人ばかりの人について、調べたものを見てもそうでありますが、私が東京で三千八百人の中から、瘦せた人と肥えた人を別けて調べて見ました成績も全くこの通りでございました、その數字の一二を御話して見ると、卒中で死にました人が肥えた方では五十人、瘦せた方では僅かに八人、消化器病では瘦せた方が十二人に肥つた方が二十一人、ちよつと倍でありました、是は何處で調べても大概同じやうな割合であります。

詰り身體の瘦せた、肥えた、顏の赤い、蒼いなどゝ云ふのは、外から見た身體の工合であるから、それに依て氣を注けて行けば病氣に對抗することも出來るし、從つて長生をすることも出來ると云ふのでありますから、そのことがハッキリ分りますと云ふと、長生をするのに大變都合が宜いことになります、前にも御話した通り體質と云ふものは生得でありますから、それを變へると云ふことは非常に困難でございますが、唯自分の身體は斯う云ふ風であるから、どう云ふ病氣に對して注意をすればよいと云ふ攝生の方針が立ちますから、長生するのに餘程容易になるのでございます、併し只今御話した所は誰にでも分つて居ると言つても宜い位な、養生をすれば長生をすると云ふことでありますから、唯それだけでは

長生をするといふことは甚だ難かしいのである。

其處で今度はモウ一歩進んで人間が發育に要する時間を調べて見、それから盛りの時代と死ぬるまでの間を調べて見たならば、壽命の長い短いの理由が分るであらうと思ひます、それで馬は發育するに三百四十日掛かり、牛は二百九十日、人間は二百八十日、犬は六十三日、猫は五十六日掛つて發育をしますから、極くユックリ發育するものは長く生きることは大體是で分る、馬とか牛とか人間とか云ふものは、三十五年とか三十年とか八十年とか云ふやうに生きる、僅か六十三日や五十六日位で發育するものは、十一年とか九年と五箇月位より生きて居ない、斯ういふ風に調べますと、發育の遲いものは長生をすることは分りましたけれども、しかし發育が長ければ必ず長生をすると云ふならば、馬が一番長生をしなければ成らぬ、然るに人間の壽命は八十に達して居るのに、牛は三十で老衰し馬は三十五で老衰する、此三つの中で發育の長い牛と馬とが人間の半分しか生きて居らぬ、又此表には書いてありませぬが、鳥と云ふものは非常に長く生きる、御承知の通り卵か引繰返つて鳥になるのは僅かの間である、それで鸚鵡や金絲雀は隨分長く生きる、中には二十年位生きるものがある、鶯なども隨分長く生きて居る、一週間位の發育日子で二十年も生られますと、少し此方の勘定が狂つて來る、是に由て觀ると發育期の長いものは長生をすると云ふことは、大體に於て間違はありませぬけれども、たゞそれだけではまだ理窟が分りませぬ。

所が壽命の上には精力と云ふものが關係する、人間の身體といふものは蒸汽機械のやうなものに出來て居つて、日々運轉して居ります、蒸汽機關の熱は石炭から拵へて、其の熱は何時でも機關運轉の原動力でありますが、人間の熱は何時も食物から取つて居る、詰り人間の食物は石炭になつて居るのであります、其石炭を身體の中で焚いて、其熱で身體といふ機關が運轉することになつて居る、併し多くの人は

其運轉の仕方が惡いので長生が出來ない、たとへば食物を十分にやらないで機械を酷く使ふときは、生理的年齢に達しないで死ぬるといふ譯である、此理窟が分りますと長生をするのは容易いのでございます、之を應用すれば必らず長生が出來る、どうすれば長生が出來るかと云ふと、人の力で避ることの出來ない原因は迚も仕方がない、例へば男子に生れるよりは女子に生れる方が長生が出來るけれども、男子を女子に直す譯には行かない、さう云ふやうなことは仕方がないが、先づ長生をする方法は今御話した第一に體質に注意して、第二に精力を使ふ加減が旨く行きますと長生が出來るのであります。

然るに、これまでの所、婦人の方は不知不識の間にそれを旨くやつて居る、又婦人の身體が自然とそれに適ふやうに出來て居る、即ち石炭となるべき食物を取るにしても、又其精力を使ふにしても、婦人の方は非常に規則正しく行くやうに成つて居る、所が男子の方はさうぢやアない、隨分石炭の空乏を訴へて居るにも拘らず、機械を非常に働かさなければ成らぬ場合がある、生存競爭の激しい世の中に立ちますのには、油が絶れたり、石炭が絶れたりしても、機械は已むを得ず運轉しなければ成らぬやうな事があるから、男子より婦人の方が長生の出來るといふ現象が現はれたのであります、是が旨く行かなければ婦人でも長生は出來ませぬ、若し是が破れますと百歳前に人間の死にます度合も、或は男子と婦人と同じやうな數になるかも知れませぬ、私は百年も後になつて此世界が段々進んで參つたならば、必ずさう云ふことに成るであらうと思ふのであります、どうしても身體を使ふと云ふことゝ食物をとることは平均して居なければならぬ、又精力を使ふことゝ休むことが平均して居なければ長生は出來ない、昔から今日まで長生の事を説いた人は澤山ありますが、近頃英吉利の人でウエーベルと云ふ人も矢張り斯う云ふことを説いて居ります。

唯今御話し申した通り英吉利の百姓が百三十まで働

いて居つたのを、急に贅澤な生活をすれば直きに死ぬと云ふ如く、甘い物を喰ふから長生をすると云ふことはない、石炭の取方と精力の使方を注意して行けば、麁食でも何でも差支へないと云ふことを、私は特に申上げたいのであります、是は主にその人の體質と云ふことに關係するので、人の體質と云ふものは親から貰つて參つたものであるから、仕方がないものとして、それをどう云ふ風に注意すれば其體質を保つて行くことが出來、從つて長生をすることが出來るかと云ふことが肝要のことになるのであります、それで、この事を能く御考へなさつたならば、コーヒーを四十杯飲んだり、御酒を毎日飲んだりしても、長生をする人は長生をしますけれども、普通の人が其眞似をしては長生をすることが出來ないと云ふことが、御分りに成るであらうと思ひます、人と云ふものは皆親から讓られた體質と云ふものがあつて、それは人々皆な違ふものであるから、其體質に適ひますやうな方法に當箝めますれば、百歲まではどうか知れませぬが、八十歲までは確かに生きられるのであります、八十歲は生理的年齡でありますから、生理的に人の死ぬ時期までは生きて居ると云ふことを確言致して置きます、甚だ詰らぬことを申上げまして恐縮の至りでございます。

叢談

熱と溫度

溫度を計るには寒暖計を使ひます。寒暖計には三色ありまして、普通の室內用、則空氣の溫度を計るのは、華氏寒暖計、人の體溫を計るのは攝氏寒暖計、此外にまた西洋諸國で室內溫度を計るのに使ふ列氏寒暖計とです。此三つが三つ共夫れ〳〵度盛りの定め方が違ふ、だから其御互の關係がはつきりして居

ませんと、醫學上の話でも、衛生上の話でも、物理學の話でも、大變わかりにくい事が出て來やうかと存じます。

第一、攝氏寒暖計。之は醫者が體溫を計るのに用ゐる計りで無く、物理學、氣象學、地文學等猶廣く申せば、一般に學術上の話には、必ず此寒暖計を使用致します。此寒暖計は外のに較べて大に都合が良い、何故良いかと申すと、此は、氷の融ける溫度を零度とし、水の沸騰する溫度を百度と定めて、其間を百等分して、度盛を致した者、此百と云ふ數が割に簡單な數である爲に、學問上の計等に重寶なのであります。

第二、華氏寒暖計。之は氷の融ける所を三十二度とし、水の沸騰する溫度を二百十二度と規定して、其間を百八十に等分した者ですから、其數の具合が攝氏のに比べると、少しめんだうですが、室内用、則氣溫を計るには、又別に都合の良い理由があるのであります。

一體空氣の溫度は夏の極く暑い日でも、攝氏では三十六七度華氏で計れば一度以上になる事がなく、又冬の極く寒い夜中でも、攝氏の零度以下十七八度、華氏の零度位より下がる事は無いのです。尤も之は溫帶地方、則西洋では重に英、獨、佛、伊多利、墺太利、亞米利加、東洋では日本なぞに於て云ふことで、朝鮮、滿洲、露西亞なぞへ行きますと、又大部樣子が違ひますが、兎に角、多くの國、殊に文明諸國では大體空氣の溫度が最低は零度、最高は百度位に當ると云ふ事が、華氏寒暖計の室内用としての特長であります。

列氏は氷點が零度、沸騰點を八十度と定めた者ですが、之れは我國に餘り用がないから委しい事は略します。

可樣に三種共凡て氷の融ける溫度、則氷點、水の煮えたぎる溫度、則沸騰點を、上下の標準として之から度盛を定めた者ですから、其相互の溫度の關係は、簡單な比例算、若くは四則算から計算して出

せますが、念の爲に二三の温度の比較を上げて見ますと、

	攝氏	華氏
氷點(則氷の融解點)	零度	三十二度
一年平均の室内温度	一八	六四・四
働作に不快を感ぜざる冬日の室内温度	一三以上	五五・四以上
夏日最高温度	三五	九五
體温	三七	九八・六
風呂の湯	四〇	一〇四
沸騰點	一〇〇	二一二

江戸つ兒と申さるゝ御方の、御好な湯は、攝氏五十度近くでありまして、之位の温度になりますと、私共には迚も長く這入つては居れません。又飲む湯も五十度位を極度の熱さと致します。素手で持つには乾いた者なれば六十度七十度、ごく些の間なれば、百度以上の者でも持てますが、濕れた者や湯の中では、六十度位になりますと、直に火ぶくれを生じます、又氣温が三十六七度以上になりますと人間は普通では迚も長く生きては居れません。

アルコールと云ふ液體は、同じく攝氏七十九度位で沸騰し、ベンチンは八十度、エーテルと云ふ者は三十五度で沸騰します。だからエーテルの煮えたぎつてをる中へ指を入れても、些しも熱くないのみか、却つて冷たい感じが致します。

全體攝氏の何度は、華氏の何度に當り、又華氏の何度は攝氏の何度になるか、又列氏と華氏、列氏と攝氏の温度の關係は何うかと云ふ事は、前申した樣に、やさしい算術で知れますから、此後は一般の學問上の習慣通り、重に攝氏の温度を土臺として、若干の事實を申述べます。

零度から百度までの温度は、之までの話で、大體の見當が御付になつたでしやうが、百度以上になつては何う云ふ者か、一體百度より上の温度は有る者か、無い者かと申すと、夫れは大いにある、上の方へは殆ど限りなく有ると申してよいのです。

「甲の物體が乙の物體よりも暖かい、」例へば「湯は手よりも暖かい」、と云ふのは、取も直さず湯の溫度が手の溫度より高い事で其溫度が高いと云ふ事は、つまり熱を多く含んでをると云ふ事に歸著致します。

第一、熱と云ふものは、固より形も、大さも有る者ではない、併し乍ら、其性質としては、或物體より他の物體に移り行く――一般に溫度の高い物體から低い物體には移りますが、低い方から高い方へは移りません。之は固より知れ切つた話で、手を氷に觸れてをれば、手の熱は屹度氷に取られるが、あべこべに氷の方から手へ熱が來て、手が溫められると云ふ事は決してないのです、勿論氷でも、手より溫度は低いけれ共、若干の熱は其中に含まれて居ります。

第二、熱を得た者は溫度が上る。――又裏から考へれば、溫度が上つたのは、則他から熱を得たのであります。

第三、熱を得た者、則溫度の上つた者は多くは膨脹する。

第四、熱を與へれば、多くの固體は融けて液體となりますし、又液體は沸騰して瓦斯體となります。

第五、熱は仕事をする、例へば汽車、滊船の蒸汽機關の樣な者です。

此外にまだ、數え立てれば澤山の性質がありますがまあ〳〵熱と云ふ者は、上に述べた樣な性質の者でありまして、色も無く、形も無く、普通は何か一つの物體の中に宿つて居つて、皮膚で觸れた時に、唯其一つの性質、則溫度のみが大體見當の付くものなんです。則熱は一種のものであつて、溫度は唯その性質の一つに過ぎないのです。

箇樣な者は熱の外にもある、例へば光とか、電氣とか、音とか、乃至は力などゝ申す者も、矢つぱり熱と同樣に、形もなければ、大さもない、香もなければ光を除いた外の者には色もありません。

其內で光は、眼で見て明るいと云ふ性質を感ずる丈、音は耳に聞いて、響と云ふ性質を感ずる丈でありますが、勿論其以外にまだ澤山の性質を光も、音も持

つて居るのです。一例を申せば、光は寫眞の種板に感ずるとか、大きい音響は障子紙を振はせるとか云ふ事は、夫れ〳〵光や、音に固有な性質の中の一つであります。

話が一寸横道へそれましたが、前へ戻つて、則ち熱が物體に割に多く含まれて居る時、(其溫度が體溫より高い時は)は溫なりと感じ、割合に少く含まれて居る時、(其溫度が體溫より低い時)は其物體を冷たいと感じます。

地球上の熱の源は、最大部分は太陽です。溫度の大變高い太陽から、溫度の割に低い地球へ、每日々澤山の熱が來る。此爲に地球の表面は大に溫まるのです。其外に、之に較べて甚僅ではあるが、物の燃える時に必ず生じ、又物體が互に摩擦する時に必ず出來ます。此ふ云ふ風に、熱が新に出來たり、又は他所から地球へ來たりする計りなら、地球は次第に溫まる計りの筈ですが、實際はそう甘くも行かんと云ふのは、地球が亦、殊に夜分に澤山の熱を、虛空に向つて發散するからです。此太陽から貰ふ熱と、虛空にやる熱とを較べて見ますと、極僅ながら、取られる方が多い相です、之は無論一年や、二年の内に、どれ丈と云ふ程では有りませんが、何十萬年、何百萬年の後には、我々の地球も殊の外冷えて、仕舞には人間は愚か蟲けら一匹微菌一つも生きては居られなくなるそうです。同樣に太陽も年々冷えて行く計りなのです。

話が又横道へ外れましたが、兎に角、熱と云ふものが上に申した樣な者でありますから、溫度は百度以上、いくらでもあると、理窟の上では考へられるのです。則、熱が上にも或物體に熱を與へれば、其物體の溫度はいくらでも昇せ得る道理であります。

一二の例を申しますと、

錫の融解點　二百三十度
鉛の融解點　三百三十度
水銀の沸騰點　三百五十七度
銀の融解點　九百六十度

金の融解點　千六十度
鋼鐵の融解點　千六七百度
白金の融解點　千七百七十度
炭の融解點　三千五百度

紙が焦げ出すのは二百度位の溫度で、石川五右衛門が釜煎になつた時は（用ゐた油によつて違ふ筈ですが）まづ種油を使つたとして、その沸騰點凡そ二百度位までになつたのです、炭火の溫度は約七百度位ランプの炎は千度あと前、鞴を使へば同じ炭火でも千六七百度程に昇ります、ですから金銀銅（一〇九〇）鐵までは昔しから人の力で融かしましたが、白金となると容易に融かす事ができませんでした、昔人皇二十九代欽明天皇の御宇に新羅から閻浮提金の佛像一體を獻上致しました、之をば、守屋の大臣が、三韓漢天竺などの野蠻國の神樣を天照大御神の子孫が拜む道理がないと申しまして踏鞴のふいごで七日七夜燒いたそうです、けれ共功德無量劫の佛體の事故錆びもせず鎔けもせず、光明彌々あざやかに在しましたので、庶民渴仰讚歎の念、一時にいや益したと云ふ事です。此閻浮提金は則今の白金の事で、錆びも鎔けもしなかつたのは其融解點までの溫度が炭火のふいごでは出來ないからです。

理論上よりは幾何でも高い溫度が出來る筈であるが實際は三千五百度位が人間の現今作り得る最高溫度で、之は電氣爐と申す爐の中で電氣の力を借りて生せしめるのです、此溫度では炭だの石炭だの白金だのが融けて液體となる許りでなく一部は更に瓦斯體となるそうです。

太陽の溫度は物理學上から推定して見ますと、大凡六千二百度位、之が人間に知られた種々の溫度の中、最高の極度と申してよいのです。

攝氏零度から百度まで百度から尚上の方は極度までの話が之でざつとすんだのですが、零度より下の溫度の樣子はどうでしやうか。

（以下次號）

斷食

斷食と云ふ事は、餘程古くから行はれたもので、身體並びに精神を清淨にすると云ふ意味から、何れの宗敎にもこれがある。つまり肉慾に打克つて神樣に御奉公するとか、貪慾を離れて成佛しやうとか云ふ殊勝な考から始まつたものと思はれるが、忽ち本の杢阿彌、何時の間にやら、人間の持前の身體が矢張一番大事、生命有ての物種と云ふわけで、神佛への御奉公振りを自分へ向けて、これで以て一つ人一培長生して見やうとか、病氣を癒して呉れやうとか云ふことになつて來て、實の所は全く己の爲めであるが、その己の爲めにする饑さを、神佛へ對しての御爲ごかしに病疾平癒の强請をするやうになつた。斯ういふ次第で、苟くも死たくない、長命したい、病氣には罹りたくない、罹れば直ぐに癒りたいと云ふ人間の住で居る所には、この慾が本位の迷信が實に種々樣々の行事となつて現はれて居る、斷食と云ふものも此類の一つで、支那流の仙人などは長命法が專門で、松の翠を食ふたり、霞を吸ふたりして壽命を延ばさうと勉めたと云ふことである。如何にも風流だが、實に慾の深い、寧ろ俗の骨頂とも云ふべき輩である、水と麩で生きて居る金魚よりも憐れな修行をして、脂氣は無くなるから二貫目や三貫目の體重は減じやうが、幾ら骨と皮ばかりでも多少人間らしい形をして居る以上は、迚も鶴の背中に胡坐をかいて雲の中まで舞上るなどは覺束ない話で、近頃頓に空中の土左衞門を生ずる彼の飛行機乘よりも愚なる考である。これとは趣は異るが、最も高尙の發達を遂げた佛敎や基督敎などの中には、其宗派の頑固なもの丶中には矢張斷食があつて、それに種々の迷信が附き纏ふて居る。尤も斷食と云ふても單に溫血動物の肉を食はないのを斷食と稱するのもある。佛敎僧侶の大部分は、實際は如何なものか知らぬが、溫血動物は無論のこと魚肉も食はぬのであるから、これは基督敎一派の斷食に比すれば、常斷食である。

所が斯樣な申譯ばかりの儀式ではなく、何物も食はない眞の斷食がある。精神病患者の中には往々これがある。しかしこれは別者として、本氣の人でも、種々の考から敢て食を斷つことがある。基督教の祖師たる耶蘇は、教化を始むるに先だつて、野の中に在て四十日四十夜飮食しなかつたと云ふ傳である。斯樣な例は宗教家の傳記などを讀で見ると澤山出て來る。

それで、始めは前にも述べた通り、宗教家などが精神修養の一助として行つた所の斷食が、有象無象の輩に依て長命法として應用され、病氣平癒の呪禁的に誤用さるゝことになつたのである。所が近頃に至て、醫學を心得た一派の人々の中にも、これを擔ぎ出して斷食療法を企て、盛に其效能を吹聽するものが起つた。何時も斯樣な面白い奇拔な大發明をするのは米國が本元で、今では最も眞面目な手堅い學風の獨逸でさへ、多少この斷食療法の賛成者がある位であるから、我邦で吹聽すれば慥かに千里眼以上に流行するであらうと思はれる。それで前以てこれを批評して置くのも、兎角千里眼になり易い御婦人方の御參考にもならうかと存じてのことである。

扨てこゝに謂ふ所の斷食療法は、昔の御信心から御利益に預る爲めの御方便ではなく、全く醫學上から見て、最も有力な治療法であると論ずるので、其説明を聞くと如何にも尤もな理屈で、實際多數の人がその御陰で全治して居る。現に亞米利加のドクトルケルローグと云ふ醫師などは盛に此流儀の治療法を施して居るのであるが、實際斷食療法に依て迅速に治癒したものも數あるであらうが、又一向效のないものもあるに相違ない。要するに眞理は何時も中庸に在るので、恐らくは無法な斷食よりも、時々暫時食物を差控へた方が穩當であらうと思はれる。長い間全然絶食するのは、自然の要求上止むを得ぬ時のことで、若し斷食をしやうと云ふ場合には、豫め特別の攝生法を講じて、その不良の症狀を免れる用心が必要である。西洋特に亞米利加邊では、大分斷

食慾が多くなつて來る様子であるが、元來吾々は平素食い過ぎて居るのであるから、斷食して始めて榮養と身體の實際需用の平均が取れる位のもので、此點から云ふと斷食も大した害はないかもしれぬ。けれども長い時間をつぶして饑い思をして、效が無いばかりでなく、不結果を得て實に馬鹿を見たと云ふやうなことさへもある。勿論絶食して病氣の良くなることのあるは疑のないことであるが、然し危險を伴ふこともあるから、型に箝つた斷食はやめて、根本的の方法に依てその目的を達した方が適當である

ドクトル、デウイは、もう亡くなつたが、此人は一千人以上に斷食を行はしたと云ふことであるが、近頃其弟子で『治療法としての斷食』と云ふ書物を著はした人がある。これを見ると、此著者は『唯一の病あり、不潔の血液これのみ、唯一の療法あり、斷食これのみ』と云ふ所から論じ出したので、要するに、血液は過食に依て不純になつて居るから、それで斷食が一番善い療法であると云ふのである。然し惜しいかな、此學説は今日の嚴密な學術的の研究に基づいたものでもなく、又信用するに足るべき醫學的觀察を經たものでもない。一體斯様な主張は、根本的に研究して、極めて精確に決定された上でなければ出來る筈のものではないのである。

兎に角血液は、身體に滋を與へ、組織を養ひ、且つ清潔にするものであると云ふことは、これは確かなことである。又血液は食物の消化に依て常に新に補はれると云ふことも慥しかである。しかし斷食さへすれば血液が清淨になると云ふ臆説は斷じて正しくない。經驗上これと反對に斷食は實際血液を不潔にすることが證明されて居る。今云ふた書物に斷食の時に起る症状を擧げてあるのを見ると次の様なことが書いてある。

舌は忽ち厚き黄白色の塊にて被はれ、總ての不淨が消散するまで附著して居る、而して舌の清潔になるのは、斷食療法が奏效した大事な徴である。

啻に舌のみならず、呼吸も亦內部の状態を表はし

て、斷食療法をして居る間は甚しく惡臭を放つ、これが矢張淸淨作用を示すもので、斷食療法の終には、復び呼吸も臭はなくなる。

病人には常に不快な臭氣がある、これは內部の惡い狀態を示すもので、自然の排泄機能に依て、これを恢復しやうと努める、これには皮膚も亦重要の作用をするのである。この發散は、斷食の間通常盛で、已に斷食者の居る室に這入る時に氣がつく、皮膚の孔から發散するのは割合に烈しくない、又他の排泄器官に依る排泄よりも汚穢でない。

斷食の始めには、急に起つと眩暈がする、眼の前に黑點が現はれる、而して一體に衰弱の感がある、しかしこれは何時もさうとは限らぬ。或人は三十日乃至四十日も斷食して何等不快の症狀も起らぬ、只口の臭いのと、體量の減ずるのみであるが、他の人は又斷食の終に至るまで前述の症狀がある。

多量の食物と不正の飲食に依て、肝臟機能を過度に努力せしめた人々には、斷食療法は往々困難である。この榮養物の鬱積して居る臟器に集まつた所の膽汁は、血行に依てこれから引出されて、多量に排泄され、內臟に行き亘り、體外に出してしまふ前に、腸運動の逆行が起る、而して此際胃が瀦溜所となるのである。それで嘔氣を催ほし、黃綠色の膽汁を吐くやうになる、この現象は必ずしも今云ふたやうな人々に起るとは限らぬが、多少その氣味がある。膽汁嘔吐が二十六日間每日あつたと云ふ一例が報告されて居る。

糞便は殆ど總ての斷食者に於て略ぼ同樣で、黑褐色の液性便に多少固形の古き糞塊を混じて居る。これは斷食の終に至るまであるもので、過度に働かされた腸が、正規に働いて居る時でも完全に排內容を排除しきれぬことを證明するのである。

第一日に於て醱酵がみとめられる、即ち瓦斯が出るのでわかる、而してこれは腸の皺襞に止まつて

居る處の固形物及び膽汁、其他の殘廢物が腸の內にある程度に從て幾日も續く。此發生する處の瓦斯に出つて往々腹痛が起りそれが排泄される迄不快な事がある。

以上記載された症狀に就て見るこ、これは明らかに腸の自家中毒の狀態を示して居るもので、斷食をすれば少なくとも其始に於てこれが起るのである。これらの症狀は體の內に滯まつた處の毒を、排泄しやうこする働に由るのであるこ云ふ學說だが然しこれは唯妄想に過ぎない。若し斯樣な症狀が適當な食餌の後に起つた時には、それは食べ過ぎたのが惡いこ云ふであらうが、斷食療法家の說に從へば、これもやはり身體に滿ちて居る毒が恰もこの食物に由つて治癒機能を引起したこ云ふ事が出來るではあるまいか。

斷食をすれば小腸は普通の刺戟を失なふから、其蠕動が止むで其の爲に却て毒が益して來こ云ふ事は極めて明らかな事である。それで毒性の膽汁が滯まつて容易に腐敗する處の粘液や、長い腸管の內容が滯はる事になる。

此斷食療法の著者も「內容の炭化を促す處の小腸の蠕動が十分にゆかぬこ云ふ事が此療法の大なる障碍である」こ云ふて居る、これが即ち屢々著者も斷食療法の缺點こして居る處で、彼の舌苔や、口臭や、惡い臭の皮膚發散などは全くこれが爲に起るのであつて、決して滯つて居る不淨が排泄される症候ではなく、却て積極的に膽汁粘液、其他の排泄物の腐敗に由つて毒が滯るためにかやうな症狀を顯はして來るのである。

かうして見るこ斷食療法こ云ふものは腸の働を制限して、其爲に腸の急性自家中毒を起さして、それが何か他の方法に由つて其障碍の止む迄待つものであるこ云ふてよい。

舌が清潔になり身體の不良狀態が、消散する迄四十日間も待たなければならぬこ考へて御覽んなさい、若し適當の攝生こ療法こを行つたならば斷食療法に

起るやうな危險や困難なしに一二週間で全快して仕まうのである。膽熱とかこれに類似の幾千の病人が、こんな斷食療法によらんでも、直つていく、これを見ても斷食療法の價値がわかるのである。

斷食療法の原理とする處は、長い間食物をとらずに總の黴菌を飢へさせて身體殊に腸管を清潔にすると云ふにあるのである、處が遺憾ながら此學說は實際矛盾して居る、腸內の腐敗は腸の分泌が不十分になり空氣が缺乏し、菓物や澱粉及び糖榮養物が不足すればいよ〳〵腐敗を助ける者で、これらは單に腐敗を防ぐのみならず腸の掃除には頗る必要者である事は誰も知つて居る處である、何も知らなければ致方がないが今日の如く吾々が知つて居る處の最も善い學理的の方法があるのに、何も古い而も難澁な斷食療法なぞに歸依する必要は無からうと思ふ。

前に述べた通り斷食の時に起る長い間續く嘔吐は決して腸の蠕動ではなく、これは糞便中に存在する毒の吸收と小腸上部に於ける停滯の證據である、即ち斷食をすれば腸が働きを止めるので、膽汁や其他の液體が滯つて胃の方に上ぼつていつて其爲に嘔吐を來すのである。是で以て大體斷食療法は如何なる者であるか、其價値も大概解る事と思ふ、然し治療上二三日間斷食の必要な場合もある、けれどもこれは今日の正確な學理に基いた醫師の指圖に依る可き事で、決して斷食をすればドンナ病氣でも直ると云ふやうな單純な考へで行ふ可きものではない、我邦でも何か病氣の時に不動樣の御堂などに籠つて無法な斷食をやる者が隨分ある、或る種類の消化器病や神經病などが間々これに由つて良くなる事もある、而うすると迷信的に其御利益を吹聽して如何なる病氣でも之に由つて直らぬ者はないと云ひ廻る、これが爲に隨分甚だしい害を招く者が少くない、實際今其例を舉げて見ると三十二歲になる一人の婦人があつた、產後に眼がかすんで仲々良くならない、而うして居る内に不動樣に御籠りをして斷食をすればきつとよくなると勸められたので一週間程これを實行し

た。而うすると良くなる處ではない段々惡くなつてゆく、遂に一方の眼は全く見へないやうになつて仕まつたと云ふので、到々前の不信心に戻つて醫者の處にやつて來たのである、これを見ると角膜乾燥症と云ふ病氣で、元々榮養が惡くなつた爲に起る病氣である、夫に以ていつて益々榮養を損するのであるから惡くなるのは當り前の話である。これは俗にも云ふ通り八ッ目鰻や鷄の肝を食べて效がある、それよりも肝油のやうな強い油氣の物を用ゐて直るので適當な療治を施して僅かに一週間で一方の眼は全く直つて仕まつたが、斷食で甚だしく惡くした方の眼は一月以上もかゝつて病氣は治まつたが眼球に雲を殘して全く直りきる事が出來ないやうになつて仕まつた、これに由つて見てもウッカリ斷食療法などを企てゝはならぬ事が分るであらうと思ふ。

美容法（承前）

第六　手と足

手の美は、一はその形と、一つはその皮膚に關するのでありまして、手の格好は顏形の美醜と竝んで美容上に大に關係致します、特に西洋では嫁入資格の一つにも數へられる位のものでありますが、手と云ふものは、身體の他の部分よりも祖先傳來の性質が表はれて居るもので、長い世代を通じて祖先から漸次躾け來つた結果が見えるものであります。貴族的の手と申しますが、實際、貴族的の手があり、又あくまで百姓的の手があるのであります。

概して格好も善く且つ美しい手は少ないものであるけれども、我邦の人特に婦人の手は、西洋人に比すれば一般に美くしい、形も好い方であります。手の形は何か體操法に依て都合好く更へることが出來る物ならば善いのですが、これはとても出來ない相談であります。それで主として皮膚、爪などの外側

について出來るだけの美を發揮すると云ふことになるのですが、これには矢張洗ふことゝ脂を擦込むことが主要な方法になつて居ります。

手の荒れてザラ〳〵するのは、大抵、不良石鹼の結果ですが、不良の石鹼の結果として更に甚しいのは諸種の皮膚の炎症であります、この爲に非常に手の外貌を醜くし、又往々仕事も出來なくなり、時としては職業を變へなければならぬやうになることもあります。それで屢〻手を洗ふ用のある人は、石鹼を選ぶことが必要である。藥用石鹼は、手の爲には全く不必要である、頻回手を洗はなければならぬ人で、常にその手を柔かに且つ滑かに保たうと云ふには、規則正しく脂を擦込むことが必要であります。これが爲には先づ三通りの方法があつて、孰れでもその好みに從つて撰用されて宜敷いのである。先づ最も簡短で、毎日應用して可いのは、手を洗つて未だ濕つて居る間に、黄色亞米利加ワゼリンを塗る、若し手袋に黄色い斑がつくのを避けやうとすれば、極上等の白色ワゼリンでも宜敷いが、石鹼の泡を洗ひ去つた後で十分に擦込んで、それから手を乾かす方法であります。

第二は稍〻複雜であるが、然し頗る好い方法で、特に手の皮膚の過敏な人には至極適當して居る、即ちそれは次の様な方法であります。

先づ手を洗つて乾かしてコールドクリーム即ち緩和軟膏と稱するものを擦込みます、それから少許り酒精石鹼を手掌に注いで、これを前のコールドクリームの上に擦つて泡沫を立てゝ、洗はずにその石鹼の泡を拭取つて乾かすのであります。

第三にはグリセリンが能く用ひられます。但し純粹のグリセリンでは良くありませんから、次に二種類の混和劑を御紹介して置きます。これは何れも濕つて居る、未だ乾かさない手に塗つて、それから手拭で乾かすのであります。

甲の混和劑としては、オレーフ油、グリセリン、黄色ワゼリン及びラノリンを等分に混和したものであ

りまして、これは毎日御用ひになつて差支へない、而して單にワゼリンだけよりも皮膚を柔かに致します。乙の混和劑と云ふのは、酒精とグリセリンが百グラム、それに十グラムの硫黄エーテルとホツフマン精が混和されたもので、頗る香も好し、脂氣も少なく、會なぞに臨む前に塗けるに適して居ります、又脂汗で臭を放つやうな手に用ひて效があります。

手を柔かにする爲めに、又洗浴後の塗擦には、グリセリンとトラガントと澱粉と水を混せたものが可い

通常價も安くて善い製劑はグリセリン軟膏であります。其他種々の物がありますが、英國や獨逸で評判の善い此種の製劑は、大概次の様な處方で眞似ることが出來やうと思ひます。

ゲラチン	五・〇瓦
水	五五・〇瓦
蜂蜜	二〇・〇瓦
グリセリン	一二〇・〇瓦

これならば如何なる場合でも危險がない、安心して用ひることが出來ます。

次に爪の衞生も今日では、なか〳〵大切なことの一つになりまして、社交上から云ふても衞生上から云ふても色々の意味を持て參りますが、實際手と爪の衞生は思ふ如には守られて居りません。

爪は善く切れる小刀か剪で以て、指の頂と並行して圓く切る、而してその圓味は指端の圓味に一致するやうにするのが宜しい、それで輪の様に切つたり、卵形に切つたりしては可ません、宜しく平らに、稍ゝ圓味を帶びた線をなすやうに切るべきであります。

爪を延して置くのは不精な人である、又爪の尖の白い處が少しもない程に切るべきものでない、爪を嚙むのは病的で、實に醜い惡習慣である、大人になるまで此惡習が續いたのは容易に治らぬものであります、それで小兒に爪を嚙む癖がある時には、これを防ぐ爲に毎朝規那丁幾或はクアシヤ越幾斯のやうな苦いものを筆で塗つてやるのが良い、然しこれでも

效のないことが多いのであります、その時には致方がない、嚴重に教育的監視をして止めさすやうに勉めなければなりません。

爪を磨くことは、殆ど必要のないことでありますが、然し磨く場合には滓を去つた酸化錫を用ひ、尙ほこれに三分の一プロセントのカルミンを加へれば程好く紅味がつきます。爪の感覺の過敏な人であれば、極細かい金剛砂と朱を等分に混じた粉に、少量のオレーフ油を加へて軟ひ泥のやうにしたものを用ひます、然し爪磨の最も簡單な方法は鹿の鞣皮で磨くのであります。

爪の病氣は餘り申上げる程のこともありません、深爪を切つたり、剝したりする時は實に不快な痛を覺えますが、不潔にして膿をもつやうなことの無いやうに注意すれば、少し爪が延びれば、それで善い、爪は四ケ月位で根から尖まで延びますから暫時の間に治癒致します、但し一度爪を剝す時は屢〻起り易いから大に注意しなければなりまん。

又爪の異常に硬いものや、軟いものが往々ありますが、斯樣な場合には爪の損傷を起し易いものであります。爪の硬過ぎるのには、屢〻指の溫浴を試みて、尙ほ次の處方の藥を鹿の鞣皮で塗擦するが可い。

甘扁桃油	三〇・〇
滑石	
苛性アムモニア水	各三・〇

軟い爪には左の藥を塗つて可い。

單寧酸	
ミルラ丁幾	各一〇・〇
酒精	
水	各二〇・〇

凡て此等の爪の病氣には、上等の絆創膏を以て、爪の根の處から固く卷きつけて效のあることがあります。これは夜だけでも善いが、出來るならば晝も試みて宜しのです。

爪の根を縁取つて居る爪滞の處が、不規則に且つ鈍く後の方へ押されること、甚しく痛を起して、往々炎

症を起し瘭疽になつたり、逆爪を生じたりするものであります、一體爪の病氣は、種々ありますが、何れも甚頑固なもので、長い間療治しなければならぬのが普通であります。

爪の美、その厚さ及び形も矢張前に述べました如く、長い間の躾の結果で、佛蘭西人の言葉に『予に汝の爪を示せ、然らば汝の何人なるかを告ぐべし』と云へるは理あることゝ思はれます。

又往々手を醜くする所のものは彼の寒瘡であります、これには電氣療法鬱血療法等を施して大に效があります、本式の鬱血療法でなくとも、牛乳罎の口の處に著いて居る護謨輪の如きものを指の根本に箝めても可いのであります、但し指が少し腫れて、赤く温くなつた時に止めるのです。又家庭療法としては橙々を切つてこれで、幾度も擦つて效があります。その他脂肪をよく擦込むことは勿論良い方法であります。

扨て實際に美しい、何處から何處まで揃つてる申分のない手は少ないものであるが、足も矢張なか〱満足な人は少ないものであります。元來美しい足に生れついた人でも穿物などに依て醜くされるのです。支那人などは只足が小さくて歩けない樣なのが好く見えると見えて、小兒の時から苦心して足を不具にすることが有名なもので、これは論外でありますが、西洋人も彼の靴の爲に、殆ど満足な足はありません、近頃は衞生上、眞正の美容法の點から靴の構造撰擇にも大に意を用うるやうになりましたが、何と云ふても物好は止まぬもので、矢張婦人は有害な形の靴を穿いて得意になつて居るものが多いのです

然し足は通常隱れて居りますから、美容上餘り直接にかれこれ云ふ必要もない譯ですが、只人に見える部分だけの所謂お化粧でない、眞に人間たる身體全部の美を發揮すると云ふ眞正の美容法上から申すと足の美は頗る大切な一要素になつて參ります。我邦にては幸にも、餘り足を不具にすることはないので、且つ足を裸出にすることも普通は左程失禮させ

られませんから、往々略ぼ完全な美しい足を見ることが出來ます、只拇趾と第二趾の間に鼻緒を挾むで歩きますので、其間が開いて居ることだけは外國人の足に比して著しく目立ちますけれども此位のことは先づ仕方がないのでせう、但し素跣足で外を歩くことは禁じなければならぬ、目下の如くペストなどの危險がある時には跣足は特に危險である。足袋を穿いて居れば先づ申分はないのです、足の衛生としては足浴が必要である、これは毎日行つて可い。足の皮膚特に趾の間に、前に手の所で述べたやうな脂藥を塗ることもありますが、これは只特別の場合であります。

足の爪も矢張手の爪と同樣に截ることが必要で、殊に爪の側方を甚しく切つてしまひますと、その下から又新しい爪が生じますから、何時も少し白い處を殘すやうにしなければなりません、拇趾の爪は趾の頭と並行するやうに、或は寧ろ僅に凹形に切るのが可いのであります。

（以下次號）

育兒

子供にも心配さすべきか

此一篇は、ドクトル、フォン、グナイストが『吾人は兒童をして我等の憂慮に與からしむべきか』てふ論説なるが、育兒上常に思ひ合はさる事柄なれば、略ぼ抄譯してこゝに掲ぐ。

歡喜と快濶とは幼者の特權なり、誰か小兒よりこの重寶を奪はむとするものぞ。野の花の如くその兒を成長せしめむと願ふ親あり、即ち凡ての世の憂さを包みて何事も知らしめず、柵を隔てたる人生實際の生活は、一切與ふることなからしむ。

然るにまた幼なきものゝ諠譁は全く禁じられたるが如く視ゆる家あり、憂と惱と悲は家の隅々より襲

ふが如く、父母の面には絶えて笑ひの影もなく、子等が顔も早く既に喜悦の失せたる面持なるあり。父母は幼き人の子に、此世の運命は屢々心を痛め、なか〳〵に重荷負ふが如きものあるを覺らしむべきか、はた此世の學びの庭に自から眼を打開きて、日影は何時もうらゝかなるにはあらで、雨風烈しく嵐吹すさぶ日もあり、心あわたゞしく、陰もたまらぬ折あるを悟るまで、何の知ることなくて成長たしむべきものか。

心に慈ある人の誰かまた、目もたど〳〵しきものゝ溝に陥るを、そのまゝには打棄置べき。此世の旅路に横はれる險難は我等が兒をもいとおしむことなし。子等をして此世の嚴かなる一面あることを全く知らしめざらむはおぞましきことなるべく日毎の業につきても誤れる思をなし、物の役に立つべうもなきうつけたる人となり、何事も女々しく、親の心盡に打離れては些の荒き事に逢ふも、痛ましうのみ心おくれて、路の小石も排けむ術しらぬ人ともなりはてなまし。

さはれ我が身の罪たるべき、やるせなのいぶせき思を子等にまで打かつけむは、餘りに慈なき業なるべし。

然れば子等をして、いち早く其時々の樣に適ひて、己が爲すべき限りを學ばしむるぞ善き、打抑へせきとむべきことども、幼きものには、餘りに押つけたる手痛きことせむは理由なきことなりかし。

人はいと貧しきにも、尚ほ喜び且幸なり得べきことだに、明かに悟らしめ得ば、人に手渡さむとき、一錢毎に三度打反すものぞと覺えたりとて、又何の害かあらむ。たゞ勇なきことは、子等に知り學ばしむべきにあらず、凡そ希望なきこと、喜悦なきことは、これ總て衰弱の狀態にして、苟も我等の健かならむ限りは、理由なき事共なればなり。子は親を鑑さするものなれば、憂にも懼にも心勇ましく、身もすが〳〵しく悦ばしげに立振舞ひなば、豫じめ世渡る業の辛さを知らしむるとも、又何の害かあらむ。

こよなき歡喜の寶珠、此世樂しき生命の悦は、夢なその心より萌ひそ、若き草木は日こそほりすれ、瑞々しく生ひ茂らむには、こゝた日影の要なるものを然れば幼なき人の子の生命は、晴やうに幸多く、愛の光に照り通らさしめよ。

子等に笑を忘れしむること勿れ、その爽やかなる、喜ばしき幼心に、親の面の物憂はしげなる小暗き陰影を投ぐること勿れ。

家の内に病人ある時などは、子等に憂はしげなる面打隱くすことの難き折もありぬべし、然れどなほ及ばむ限りは、悦ばしき童の幸を毀たざらむとこそ務むべきなれ。

秋去り冬來り、日もやう／＼西に傾き初めて、うら悲しき黑雲の我世を覆ひ去らむとする時も、彼のうらゝかなる日影の名殘を止め得む爲めに、その憂こひだたことえたと知らぬ嬰間の幼時を惠めよかし。幼時の喜なきは、既に幾その人をか苦し／＼き人と成らしめしぞ。恐もなしに打戯れて、仇なる世の様に臆氣なる夢醒して、由なき徒事し出さむは愼むべきことなりかし。

子等をして此世の旅路には、荊あり、溝あり、泥濘あることを知らしめよ、然れど又途すがら摘みぬべきこゝだくの花あることを教へよ、逆卷く浪に橋の折るゝことあらむも、泳ぐ術だに知らば浪も越えぬべきことを學ばしめよ、然らば子等は喜に滿てる强き人ともなりぬべし。

齒牙養生訓

一、齒を淸潔にし、口を淸くすることは、健康を扶持するに必要なり。この故に屢々口腔を洗ひ淸むることを忘るべからず、少くとも食事の後には、必ず洗ふを習慣とすべし。

一、食事終らば、食物の殘れるものをとり去る心し。齒と齒との間に永く殘物を貽し措くべからす。

一、齒楊子にて、齒牙をみがくことは、朝夕に於て行ふべし。此際齒刷毛は、齒の面を上下の摩擦すべし。

一、良き乳齒は、良き永久齒を生ずるものなれば、乳齒の時より養生のことを忽にすべからず。

一、この故に、生後第三年以後は、年毎に二度は齒科醫の診査を受くるやうに勉むべし。若し齲齒を發見せし場合は、猶豫すべからず、齒石は必ずこれを除き去るべし。

一、齒痛の現はるゝまで、齒科醫の許に行くことを延ばすべからず。

一、顎骨の生長と齒牙の強さの度は、何れも咀嚼作用に關係あれば、何種の食物と雖も、良く咀嚼することを怠るべからず。良く咀嚼すれば、半は、消化することを得べし、よく小兒にさとすべし。

一、骨と齒をして、活潑の發育を遂げしめんとせば、石灰に富める榮養をとるを要とす。この故に小兒に對しては、斯種の榮養を與ふることを勉むべし。例へば新鮮の牛乳、肉、強性黒パン豌豆、綠菜の如き野菜等これなり。殊に水中に石灰を多く含まざる地方にありては、其必要も亦大なり。

一、澱粉性及び糖分を含有せる食餌(馬鈴薯、米、パン等の如き)は、齒に對して、肉類よりも害あり。

家庭衛生

醫師を招く心得

何れの家でも數人の家族があれば、大概誰か一人二人は風を引いたとか、頭痛がするとか、指を腫らしたとか云ふ者が出來て、どうしても一年に一二回は

醫師の厄介になるものである。それで醫師の許に行き、或は醫師を招くことは誰も承知して居るが、病人又は病家が醫師に對する考ど、醫師が病人病家に對する感情とは餘程異つて居る、それで醫師が治療し又は往診する時の心持を知らぬと、隨分間違た考へを起して、互に面白くないことになつたり、又狠狽したり、損をしたり、些の加減で生きると死ぬの差をも生ずるやうなことさへもありますから、醫師が病家に對して常に希望する所を承知して居られたならば、爲になることもあるだらうと思ひまして、少しばかり玆にそれを申述べて見る積であります。

常聘醫

舊家、又は大家になりますと、必ず賴みつけの醫師或は掛りつけの醫師と云ふものがある、斯樣に信ずべき老練の醫師を一人定めて置いて、病人ある時は無論のこと、家族の者の健康上の事に關しては、何事でも先づ其人に相談して取計らうようにすることは非常に利益のあることであります。其理由を申しますと先づ如何なる名醫でありましても、始めて招かれました時には、其患者の生れた時から今日に至るまでの身體の有樣に就て種々の事を一々聞かなければならぬ、所が其家庭の樣子も知らなければ、隨分聞きにくい事もあり、又聞き落す事もある、患者の性質も知らないから、直ぐ治療に取掛り兼ねるやうな場合があります。然るに平素から能く其家の事情も知て居り、其家の人々の身體に就いても知つて居る醫師なれば、病人に接して直ちに其大體の樣姿が解かり、原因なども聞かずして明瞭になることが多いのです、それのみならず人の身體には各々種々の差異があつて、一見病氣のやうに見えて別に病氣でないこともあり、又古い病氣の痕跡の殘つて居ることもある、斯樣なことは度々其身體を診察した醫師は、別に怪しまないが、初めて診察する醫師に取つては、其の異常の意味を明かにするまでには餘程困難することがあるのであります。又藥も其人々に依て特別に能くきく藥と、きかない藥があり、或

は特異質と云ふて、普通の人には何でもないものも直ぐ中毒を起して、其割合に病氣には效を奏しないようなこともありますが、所謂掛りつけの醫師になりますと、彼の人はこう、此の人はこうと明かにその人の體質を承知して居りますから、飽くまで注意が行屆いて、取落がない、且つ偶然の病狀についても直ぐ其意味が解かるので、容易に狼狽したり、誤診誤治をするようなことはないものであります。それで必ずしも世界一又は日本一といふ評判の醫師でなくとも、なるべく近い所に住んで居て、相當の學識經驗ある堅實な醫師を一人常聘醫と定めて置くことが必要と存じます。

醫師變更

世には醫師に治療を託して、二三日で其病氣が恢復しなければ直ちに他の醫師に變へる人があります。これは前に申上げた理由からしても、其の不利益なことがお解りにならうと思ひますが、しかし病氣に依では實際他の專門家の治療を要する事もあり、他の醫師の相談を請はなければならぬ場合もありませう、けれどもそれは、今迄の主任醫が申出すか、或は此方から其希望を述べて、熟議の上轉醫するなり或は立合應診を乞ふべきであります。それを今迄の醫師に一言の斷りも無しに、竊に他の醫師に診療を乞ふことは、第一今迄の醫師に對する禮でない、又新に依賴された醫師も大に迷惑することであります。それのみならず、若し今迄他の醫師の治療を受けて居つたことをも明かにせず、始めて診療を乞ふようなことを云ふ人がありますが、これは實に危險なことで、醫師は前の醫師が如何なる治療を施して居たか知らないから、往々これが爲に診斷を誤ることになり、又藥には四五日も用ひたならば、是非一時休まなければならぬものがありますが、若し前の醫師が此種の藥を用ひ來つたことを知らなければ、矢張同藥を處方することがありませう、そうすると、その藥に慣れてしまつて居るので、同じ分量では效能がない、或は此迄の藥の作用して居る所に、更に

藥力が重なつて一時に強く働き、その爲に危險に陷いるようなことがありますから、前に醫師の治療を受けて居つたことを隱したりしてはならぬのであります。

使者

家族に病人が出來て、醫師の許へ使を遣る場合には、現に其病人を見た、慥かな人を遣るのが最も良策でありますが、若し召使の者などを走らす時には、簡短明瞭に其病狀を認めて持たしてやるやうにする。そうでないと兎角過を來し易いものであります。先づ急な場合であれば住所姓名、年齡、次に何時間或は何分程前から腹痛が甚しいとか、血を吐いたとか、何處の部分を何で怪我したとか、卒倒したとか、簡短に病狀を記してやります。單に『病人がありますから直ぐ來てください』と云ふような使では、如何なる病人か分かりませんから、醫師は先づ應急手當の藥籠だけを以て飛で參ります。そうすると案外外科器械の必要な病人で、再び使を馳せて所要の道具を取寄せねばならぬと云ふような場合が往々あります。前以て大凡の病狀が分つて居れば、醫師は一通の準備をして參りますから、大概それで間に合ふものであります。急な場合には、電話で依賴するのは勿論便利ですけれども、是亦間違を起し易いものですから、生命にも拘はるような大事なことは、餘程注意しなければなりません。その電話について頗る滑稽な而も危險な話があります。ある時英國は倫敦のさる家に病人が出來た、そこで直樣醫の宅へ電話で以て『アー、モシ〳〵、私の家内ですがらねえ、ツイ先刻から頸の所が非常に痛んで、そして腹の具合も、どうやら停滯して善くないので困つて居りますが、如何致したら宜しう御座いませうかと』言ひますと、醫者の方からは『ハ、ハー、それでは御熱があるのでせう、それでは……』と言ふ矢先に電話が混線したものと見えて、ある器械製造所からでも掛けて居るかと思はれる電話が聞えて來た、それは何んと云ふて居るかと思ふと『それでは

……何んでも内部に故障が起つて居るに違いない、仕方がないから今晩は、それを横に臥かして置いて、十分冷却せよ、而して明朝になつたら何んでもしたゝか擲け〳〵、槌で以てウンと敲いて見い、而して後で、十分の壓力のあるポンプで以て口から水をドシ〳〵通して見い……それで直きに治るだらう、イヽカ解つたか」と云ふのである、これには亭主も流石アッとばかり開いた口が塞がらなかつたと云ふことであります。これはまあ眞實か虚僞か存じませんが、兎に角思掛もない間違の起ることがありますから、藥の分量や何かに關する問合せなどは、電話では餘程注意しなければなりません。

(以下次號)

如し。

鳩山春子　小濱芳子　濱尾作子
岡田德子　山本多穗子　羽田三緒子
山口貞子　田村きよ子　高木錸子
丹波貞子

（以上出席順）

○婦人衛生會山形支會

同支會に於ては篤志看護婦人會、愛國婦人會と合同し、去る一月十日午後五時より同市縣會議事堂にその新年會を催したるが出席者六十餘名にして、佐藤夫人の開會の辭了るや直ちに宴會に移り、福引等の餘興ありて各歡を盡し散會せしは九時頃なりき、尙ほ當日の來賓の主なる人を擧ぐれば馬淵知事、岸本、澤田の兩事務官及び各講師の諸士にして盛會を極めたりき

私立大日本婦人衛生會

○本會入會者

○岡田德子紹介
●本郷區湯島天神町一ノ二〇　通常會員　鎌倉八千代子

○前川照子紹介
●兵庫縣武庫郡本山村野寄久原邸内　通常會員　川面冬子

○濱尾作子紹介
●赤坂區青山病院邸内　通常會員　齋藤勝子
●麹町區霞關大官官舍　特別會員　石井たま子

○新潟支會入會者

○莊司紹介
●小石川原町一〇一女子學寮　通常會員　藤岡伊和子

○竹山れつ子紹介　通常會員　鍵富かう子

○中村しげ子紹介　通常會員　村田みち子
通常會員　山本みす子

○若杉きく子紹介　通常會員　和田いつ子

○山形支會入會者

○田尻清子紹介　特別會員　津久井幸子

○堀口富子紹介　通常會員　佐々木うめ子

○轉居

●牛込區加賀町一ノ二　石川さわ子
●大阪市西區靭南通五ノ五一　安田麗子

明治四十四年一月現在

私立大日本婦人衛生會會員名簿

私立大日本婦人衛生會

私立大日本婦人衛生會名簿

總裁東伏見宮依仁親王妃周子殿下

○本會役員

會長　侯爵夫人　鍋島榮子
副會長　男爵夫人　濱尾作子
幹事　鳩山春子
同　羽田三緒子
同　岡田德子
同　高木鐐子
同　山本多穗子
同　松平芳子
同　三浦敎子
評議員　石川さだ子
同　岩下ゆか子
同　濱田捻子
同　長谷川仲子
同　服部繁子
同　仁禮壽賀子
同　西升子

評議員　土肥多越子
同　緒方悅子
同　岡山とし子
同　小川孝子
同　男爵夫人　加藤鈴子
同　片山總子
同　吉武輝枝子
同　丹波貞子
同　高橋孝子
同　田村きよ子
同　男爵夫人　南部隈子
同　中濱芳子
同　子爵夫人　松井正子
同　岸澄子
同　三宅藤子
同　宮本樂子
同　宮下咲子
同　山口てい子

東京會員之部

○本會贊成員　（順次不同）

（●本會にて講演又は執筆せられし諸氏）

本鄉區新花町　醫學博士　●入澤達吉
小石川區戶崎町六十一　理學博士　●飯島魁
京橋區南鍋町一丁目七　ドクトル　●伊澤信平
●色川圀士
本鄉區弓町二丁目　ドクトル　●飯盛挺造
麴町區平河町　赤十字社　●岩井禎造
四谷區大番町十九　理學博士　●石川千代松
小石川區金富町三十三　帝國大學總長男爵　●濱尾新
神田區北甲賀町十　醫學博士　●濱田玄達
小石川區音羽七丁目十　法學博士　●鳩山和夫
赤坂區新町三丁目十五　萩原彌四郎
醫學博士　●芳賀榮次郎
本鄉區元町一ノ二　●長谷川泰
本鄉區東片町百十六　醫學博士　●緒方正規
牛込區大久保余丁町八六　●堀內文次郎
麴町區下二番町四十六　醫學博士　●土肥慶藏
麴町區三番町三十六　醫學博士　●岡田和一郎
本鄉區東片町百三十一　醫學博士　●大澤謙二
醫學士　●大西秀治
本鄉區曙町十六　醫學博士　●大澤岳太郎
本鄉區弓町二ノ二十一　●恩田重信
麴町區上二番町四十四　法學博士文學博士男爵　●加藤弘之
麴町區下二番町四一　醫學博士　●加藤照麿
神田區小川町五十一　醫學士　●賀古鶴所
麴町區富士見町四ノ四　醫學博士　●河本重次郎
本鄉區西片町十、ろノ二　醫學博士　●片山國嘉
本鄉區龍岡町三十四養秀館內　●金谷彥二
下谷區中根岸三二八根岸養生院　醫學士　●神尾駿
神田區北甲賀町　醫學博士　●金杉英五郎
芝區芝伊皿子町七十五　ドクトル　●高山紀齋
京橋區西紺屋町十　醫學博士男爵　●高木兼寬
麴町區內幸町一丁目三　法學博士　●高木豐三
下谷區練塀町田代病院　醫學博士　●田代義德
赤坂區高樹町八　男爵　高崎正風
神田區駿河臺鈴木町二　醫學士　●高田耕安
本鄉區駒込妙義坂二五三　藥學博士　●丹波敬三
下谷區東京衛生試驗所內　藥學博士　●田原良純
本鄉區弓町二ノ二十四　大日本教育會長男爵　辻新次
本鄉區西片町十、いノ十一　理學博士　●坪井正五郎
麻布區木村町四十四　男爵　南部甕男
赤坂區青山南町七丁目三　理學博士藥學博士　●長井長義
麴町區下二番町七十四　醫學博士　●中濱東一郎
本鄉區彌生町二、はノ十七號　醫學博士　●隈川宗雄
麴町區富士見町五丁目三　醫學士　●山根正次
京橋區築地三丁目十五　醫學博士　●山田鐵藏
本鄉區駒込千駄木町五十七　東京衛生試驗所　●丸山長四郎
麻布　男爵　●後藤新平
本鄉區元町　ドクトル　●小此木信六郎
小石川區指ヶ谷町瘂啞學校　盲啞學校長　●小西信八
赤坂區青山南町二ノ四十二　醫學士　●古川榮
小石川區高田老松町二十一　布施正顯
歸國中　●エ、ベルツ

住所	肩書	氏名
日本橋區藥研堀町	醫學士	●甲野棐
小石川區豐川町二十四		●寺田勇吉
小石川區原町三一		宮川保全
神田區北甲賀町十四	子爵	秋元興朝
牛込區東五軒町十四		足立寛
日本橋區蠣殻町二ノ十四 中外醫事新報社内		阿部喜一郎
神田區北甲賀町十一	醫學博士	●佐々木政吉
日本橋區矢ノ倉櫻井病院長	醫學士	●櫻井郁二郎
麹町區三番町三十二	醫學博士	●榊順二郎
麻布區今井町二十二	醫學士	●北村精造
本郷區森川町一、中通百〇六號	醫學博士	●木下正中
	醫學博士ドクトル	●北川乙治郎
神田區三崎町三丁目一	醫學博士	●三浦守治
神田區北甲賀町三	醫學博士	●三浦謹之助
麹町區内幸町一ノ三	醫學博士	●三島通良
小石川區竹早町八十一	醫學博士	●三宅秀
神田區雉子町三十一	小兒科	●宮木伸
神田區裏猿樂町	醫學博士	●三輪信太郎
小石川區林町六十二	伯爵	●土方久元
麹町區飯田町六ノ十九	醫學博士	●弘田長
小石川區掃日町四十九	ドクトル	●須田卓爾
牛込區東五軒町四三	醫學博士	●栗本東明
麹町區中六番町二十四	藥學博士	●高橋順太郎
神田區南甲賀町十七	醫學博士	●朝倉文三
京橋區數寄屋町三ノ七	醫學博士	●林春雄
四谷區内藤町一	醫學博士	●横手千代之助
本郷區千駄木町五十		三田谷啓
芝公園五號	醫學博士	●北里柴三郎
下谷區徒士町三丁目五十八	醫學士	●笹川三男三
麹町區虎ノ門内女學館内		西田敬止
歸國		ミスヒユース
神田區元柳原町三十		●源胤昭
本郷區西片町十ろノ十	醫學博士	●呉秀三
神田區猿樂町十二	婦人科	●水原漸
日本橋區本石町二ノ七	醫學士	●田村光顯
本郷區西片町十、ろノ十號	醫學博士	●佐藤達次郎
四谷區本村町三十七	ドクトル	●山上兼柳
神田區小川町六十	醫學博士	●宮本叔
日本橋區吳服町二十	ドクトル	●志村誠麿
本郷區曙町十七	醫學士	●石原久
東京醫科大學衛生學教室	醫學士	●石原喜久太郎
本郷區丸山新町	醫學士	●唐澤光徳
京橋區尾張町二ノ十八		五十嵐赤太郎
		本田増次郎
本郷區蓬萊町六五	醫學士	森田正馬
牛込區加賀町二ノ三十二	醫學士	百瀬文溪
小石川		●ミセスコーツ
本郷區西片町九	ドクトル	●富士川游
芝區三田二ノ十四	ドクトル	●松山陽太郎
四谷區坂町五十六	醫學士	●山田弘倫
下谷區練塀町三十五	醫學博士	●桐淵鏡次
本郷區千駄木町二十二	文學博士 醫學博士	森林太郎
本郷區弓町一ノ十六	醫學士	●橋本左武郎
麹町區中六番町三十一		●島田三郎
海軍々令部	子爵	●小笠原長生
麻布區廣尾町六	醫學士	●内野仙一

麴町區元園町一ノ四 醫學士 ●上田剛之助
本鄉區駒込東片町百五十二 醫學博士 ●磐瀨雄一
神田區駿河臺鈴木町十六 醫學博士 ●遠山椿吉
京橋區木挽町五ノ三 醫學士 ●大野豐太
神田區東紺屋町六 醫學博士 ●木村德衛
日本橋區蠣殼町二ノ三 ドクトル ●日高昴
赤坂區表町三ノ三六 醫學士 ●寺田豐作
日本橋區矢ノ倉町二 醫學士 ●寺田織尾
本鄉區臺町廿七鳳鳴館內 醫學士 ●澄川德
日本橋區品川町八 醫學士 ●櫻田龜一郎
神田區猿樂町 醫學博士 ●佐藤三吉
日本橋區大傳馬町十四 醫學士 ●佐藤得齋
日本橋區北島町一ノ三十三 醫學博士 ●岡田榮吉
府下西大久保四二二 醫學博士 ●北島多一
日本橋區本町一ノ十二 ドクトル ●菊地循一
淺草區須賀町 醫學士 ●鳥居春洋
本鄉區眞砂町二十八 ドクトル ●西山信光
本鄉區西片町十、ほノ十 藥學博士 ●石津利作
本鄉區西片町十、いノ十五 伊藤弘一
神田區小川町六十 醫學博士 ●二木謙三
小石川區新諏訪町四 檜山鐵三郎

○終身會員 （いろは順）

本鄉區三組町八十六 石崎つろ子
麴町區二番町三十一 井上むつ子
本鄉區春木町二ノ五十六 伊東まき子
小石川區金富町三十三 男爵夫人 濱尾作子
小石川區音羽七ノ十 鳩山春子

京橋區築地三ノ四 男爵夫人 花房千鶴子
小石川區小日向臺町一ノ二十 長谷川仲子
神田區北甲賀町四 西邑せつ子
芝區高輪南町五十九 仁禮壽賀子
牛込區拂方町九 穗積歌子
本所區松井町三ノ二 本多幸子
本鄉區西片町十、ろノ十六號 岡澤わか子
牛込區早稻田町 伯爵夫人 大隈綾子
淺草區新森田町二 大谷嘉知子
小石川區茗荷谷町八十一 笠井梅野子
深川區島田町九 鹿島いと子
牛込區市ヶ谷砂土原町二ノ一 加藤春路子
麴町區上二番町四十四 男爵夫人 加藤鈴子
本鄉區駒込妙義坂二百五十三 丹波貞子
小石川區水道端二ノ四九 子爵夫人 田中すま子
麻布區市兵衞町一ノ五 田中とら子
京橋區西紺屋町十 男爵夫人 高木とみ子
麴町區飯田町三ノ二十九 高木くら子
牛込區砂土原町一ノ三 鍋倉梅子
麻布區本村町四十七 男爵夫人 南部隈子
神田區猿樂町二 上原豐子
神田區淡路町一ノ四 宇津木しげ子
日本橋區本船町中村屋方 山崎かつ子
本所區相生町四ノ十七 山本喜代子
麴町區上六番町三十三 眞野たか子
芝區伊皿子町二四ノ一 子爵夫人 牧野美子
府下豐多摩郡大久保村東大久保高塲 前田朗子
下谷區谷中天王寺町四 藤村美代子
芝公園十一號地ノ八 安達芳子
芝區伊皿子町七十 岸澄子
小石川區竹早町八十一 三宅ふじ子

神田駿河臺袋町十五　三浦敬子
京橋區因幡町七　宮下咲子
小石川區水道町二　三井捨子
下谷區中根岸四十一　清水とく子
小石川區大塚坂下町四四　清水しづ子
日本橋區中洲第五號ノ一　日比谷しと子
牛込區仲ノ町八　森寛子
芝區高輪北町四十八　茂木操子

○特別會員（いろは順）

麹町區一番町三一　岩佐千賀子
淺草區猿若町一ノ三十七　岩田晴子
芝區高輪南町　男爵夫人　岩崎早苗子
麹町區紀尾井町三　岩下ゆか子
麹町區永田町二ノ三十三　伊集院しげ子
芝區高輪車町三十八　子爵夫人　伊東ちせ子
芝區田町七ノ六　今村家蕣子
四谷區大番町十九　石川さだ子
京橋區築地三ノ八　池田米子
府下荏原郡品川町品川宿　男爵夫人　池田覺子
麹町區永田町二ノ一　早田純子
赤坂區一ツ木町八十一　羽田三緒子
小石川區指ヶ谷町九　長谷川てう子
赤坂離宮裏門内　馬場福子
下谷區龍泉寺町百四十八　原れい子
麹町區中六番町九　荻原淳子
神田區駿河臺袋町十三　濱田捨子
京橋區木挽町十ノ十四　林さと子
小石川區大塚窪町五　濱欽子
日本橋區濱町一ノ一　仁杉うた子
芝區芝公園二十一　西澤ゆき子

赤坂區氷川町三　保利久土子
小石川區原町三十四　穂積松子
芝區三田綱町一　伯爵夫人　徳川知子
麹町區下二番町四十六　土肥多越子
赤坂區青山南町六ノ三十　徳富靜子
麹町區三番町三十六　岡田德子
赤坂區氷川町五十一　太田龍子
麹町區富士見町二丁目　折田しゆん子
日本橋區濱町一ノ十二　岡田三重子
本郷區東片町百十六　緒方悦子
神田區西四川町一ノ八　岡村隆子
四谷區右京町十三　尾崎菊枝子
麹町區平川町六丁目十四　岡山とし子
日本橋區小網町四ノ五　大森ちやう子
麹町區上手三番町十木澤方　岡野いく子
芝區琴手町五　渡邊錄子
麹町區飯田町四ノ三十一　鷲山彌生子
麹町區下二番町四一　加藤常子
本郷區丸山福山町二十　川島けい子
赤坂區一ツ木町七二　川島京子
京橋區南金六町十三　河浦民子
本郷區西片町十、ろノ二　片山かめ子
府下日暮里元金杉一九二　片岡敏子
神田區北甲賀町　金杉松子
麹町區飯田町六丁目　樫村榮子
麹町區富士見町四ノ四　河本かめ子
麻布區霞町一　吉武輝枝子
麻布區霞町一　門野駿子
神田區淡路町二ノ四　吉井しん子
麹町區内幸町一ノ三　高木錄子
日本橋區本石町二ノ七　田村きよ子

爵位	氏名	住所
	高山愛子	芝區二本榎西町二
	高橋ルイセ	麴町區中六番町二十四
	高橋孝子	日本橋區本町二ノ十二
	田代はる子	下谷區練塀町六十一
	竹中春子	府下豐多摩郡大久保百人町南通一
	園田きん子	芝區巴町二十九
男爵夫人	辻さと子	本鄉區弓町二ノ二十四
	津輕りき子	小石川區茗荷谷町六十七
	鮎原誠子	赤坂區福吉町一
	中村銑子	小石川區原町十三
	長與閑子	麻布區富士見町三三
	中濱芳子	麴町區下二番町七十四
	長井とし子	日本橋區蠣殼町三ノ五
侯爵夫人	鍋島榮子	麴町區永田町二ノ一
	中村晉海子	牛込區南町三十三
	中村春子	小石川區宮下町十
	中野咲子	日本橋區吳服町二十二
	村井孝子	麴町區永田町
	村井竹子	麴町區中六番町三九
	村井光子	麴町區上六番町十四
	宇野きよ子	四谷區南寺町十三
	植村まき子	芝區琴平町十五
	野村友子	京橋區築地三ノ十一
侯爵夫人	黒田清子	赤坂區福吉町一
	黒河內朗子	京橋區弓町二十四
	吳みな子	小石川區關口臺町二十一
	八十島德子	芝區白金臺町一ノ七一
	山脇ふさ子	赤坂區檜町三
	山形いね子	麻布區竹谷町一
	山口てい子	牛込區拂方町九
	山本多穗子	麴町區上二番町三十八

爵位	氏名	住所
伯爵夫人	松平充子	四谷區元鮫ヶ橋町五十八
子爵夫人	松井正子	麴町區飯田町六ノ二十
子爵夫人	松平八百子	本鄉區龍岡町八
男爵夫人	松平滿壽子	赤坂區表町四ノ四
	松平芳子	赤坂區表町四ノ四
	間野俊子	本鄉區上駒込傳中一六四
	松田まさ子	神田區西小川町二ノ十
	松井きゝ子	牛込區市谷加賀町一ノ十八
	松岡光子	麻布區材木町二十四
	藤村とめ子	京橋區築地明石町六十一
	福間ふみ子	小石川區林町九八
	古市こう子	本鄉區弓町二ノ三十四
	小松いさ子	京橋區遞信省官舍
	木場こゆり子	赤坂區青山原宿二〇九
	近衛もと子	府下北豐島郡高田村
	遠藤波津子	京橋區南金六町十五
	安藤つま子	日本橋區濱町一ノ三
	秋田治子	牛込區新小川町一ノ十四
	相磯まさ子	麻布區今井町三十六
	足立清子	麴町區上六番町二十
	齊山季子	本鄉區弓町二ノ三十四
伯爵夫人	阿部篤子	本鄉區西片町十
	阿部優子	芝區三田松坂町三十四
	佐々木芳子	神田區駿河臺北甲賀町十一
	佐藤とく子	日本橋區大傳馬鹽町十四
	佐藤らく子	本鄉區湯島新花町九十八
	齋藤春子	麴町區虎門內海運官舍
	佐藤みさほ子	本鄉區西片町十はノ十九號
	西園寺留子	京橋區木挽町一ノ十一
	坂谷こと子	小石川區原町百二十六
	櫻田節子	麻布區富士見町五三

小石川區竹早町一二四 男爵夫人 菊地たつ子
麹町區四番町五 木内磯路子
牛込區砂土原町一ノ二 菊地みれ子
日本橋區本町一ノ十二 菊地みや子
麹町區富士見町一ノ二十九 三井五十子
神田區雉子町三十一 宮本樂子
麹町區四番町十四 三輪田眞佐子
神田區裏猿樂町 三輪八三子
神田區駿河臺北甲賀町十七 清水たけ子
麻布區廣尾町三十 白石まむ子
牛込區若宮町四十一 首藤濱子
赤坂區青山北町六丁目 下田歌子
麹町區飯田町五ノ三五 東村みれ子
芝區榮町十三 伯爵夫人 久松貞子
麹町區飯田町六ノ十九 弘田征子
麹町區内幸町内相官舍 男爵夫人 平田逸子
牛込區市谷仲町十七 廣井つな子
京橋區南小田原町四丁目 森田きみ子
小石川區原町十三 茂木政子
小石川區武島町九 森井きぬ子
芝區高輪南町 毛利安子
牛込區横寺町五十八 杉山こと子
小石川區春日町四十八 須田しつ子
四谷區須賀町二十四 杉村よし子
本郷區切通坂町 杉村光子

○通常會員（いろは順）

いノ部

麻布區富士見町九 石河里子
麹町區永田町一ノ十七 男爵夫人 伊東やへ子
赤坂區溜池榎坂町四 岩野幾世子
麻布區宮村町四十二 伯爵夫人 井上武子
牛込區矢來町三山里四六 今井倭次子
小石川區關口臺町音羽養生院 岩田もと子
芝區巴町二十四 石黒よし子
小石川區指ヶ谷町盲啞學校 石川さの子
本郷區天神町一ノ九十四 今田利子
深川區木場町十五 井澤ろく子
麹町區飯田町一ノ四 一井てい子
神田區今川小路三ノ三 出浦のぶ子
赤坂區青山北町六ノ三十三 石光佐宗子
牛込區袋町八畑方 飯田幸子
芝區三田四國町二十八 井上美代子
神田區仲猿樂町十七 井本秀子
小石川區西原町二ノ四十 井ノ口たず子
京橋區桶町二十六 石崎ひさ子
日本橋區桶町九 磯部つや子
本郷區西片町十、ろノ八號 祝のぶ子
芝區櫻川町二 石丸徳子
麻布區宮村町九 井倉れい子
本郷區丸山福山町十三 石井ふみ子
下谷區仲徒町二ノ六十五 石橋よし子
京橋區船松町十五 池谷八重子
神田區猿樂町二 伊澤みれ子
牛込區築土前町二十 井上松野子
小石川區高田老松町四五 井口おぐり子
牛込區矢來町四ノ四六 石川さわ子
牛込區原町二 石栗とせ子
本郷區西片町十にノ十九 市原すみ子
芝區新幸町街六 今井りう子
本郷區千駄木林町一九三 生田藤尾子

小石川區巣鴨病院内　石橋はや子
麻布區山元町三十三　今みつを子
芝公園十一號澤運寺内　伊東かう子
日本橋區久松町四九　稻村鶴子

はノ部

京橋區弓町朝報社内　服部桂子
麹町區下二番町三十一　林竹子
麻布區龍土町五七　橋本貞尾子
本郷區曙町三　服部もと子
麹町區飯田町三ノ十五　原みつ子
麻布區市兵衛町二八五　林榮子
日本橋區北鞘町二　林つろ子
神田區小川町四十一　林さく子
神田區南甲賀町八　原政子
下谷區御徒町一ノ三十五、前田方　早川花子
麻布區仲町五　長谷川たよ子
小石川區原町百三十三　萩原ひさ子
淺草區駒形町三十二　橋本いま子
神田區同朋町二十一　早川つれ子
本所區向島須崎町一二九　畠山八重子
淺草區北三筋町一　林はろ子

にノ部

麹町區飯田町六ノ十六　西尾京子
下谷區茅町二ノ二七根岸方　仁科まつ子
神田區猿樂町二ノ一新野方　西村藤子
麻布區簞笥町六十五　錦織梅子
日本橋區馬喰町四川岸　日本橋高等女學校

ほノ部

赤坂區青山南町七丁目青山學院　本多てい子
小石川區春日町四九寺尾方　堀口きみ子
本郷區西片町十四ノ九　前守ふみ子

とノ部

牛込區宮町十三　豐島清子
牛込區市谷田町二ノ十一　鳥山たつ子
牛込區矢來町町十四　東儀ゆき子
麻布區一本松町二十四　富永わき子

ちノ部

京橋區常磐町二　千足繁子
小石川區大塚坂下町二八　地口なかの子

た、をノ部

神田區雉子町二十三　尾崎つや子
本郷區湯島新花町九七　大澤と代子
神田區猿樂町十九　大岡ちか子
本郷區東片町百三十一　大澤さく子
下谷區御徒町一ノ四　大森くめ子
京橋區築地二ノ五　岡崎ふさ子
麻布區本村町百七十四　岡崎きよ子
南豐島郡千駄ヶ谷村　侯爵夫人　大山捨松子
麹町區永田町二ノ十三　大島つい子
本郷區弓町一ノ八　岡野なりえ子
小石川區白山御殿町一〇六　小田川すい子
麹町區山元町一ノ四　小山田かち子
牛込區原町一ノ五十七　小田川みつ子
芝區三田四丁目七　大木次子
牛込區仲町三十三　岡崎いし子
日本橋區濱町二ノ十二南ノ九十六號　大八木幸子

京橋區築地一ノ二十六　岡本春子
日本橋區本銀町一ノ八王孫方　小野かね子
麻布區笄町一七一　大井上かね子
牛込區若宮町二十八　大井上ちかよ子
本郷區湯島切通坂町杉村方　大谷木柳子

わノ部

赤坂區新坂町二十一　渡邊松子
日本橋區濱町三ノ一　若林かね子
麻布區網代町一英學方　藁谷保子
麹町區平河町六ノ二十六　渡邊かつ子
牛込區大久保余丁町百九　渡邊仙子

かノ部

麻布區東町二十四　川上やす子
赤坂區青山穏田三十二　加藤つろ子
小石川區江戸川町十七　河津敏子
麻布區三河臺町三十二　川淵時子
牛込區若松町五十九　川地遊龜子
赤坂區青山南町六ノ二　神石てう子
本郷區菊坂町七一　神谷ゆき子
芝區榮町十三　菅輝子
本郷區彌生町三ほノ三十　河村孝子
赤坂區青山高樹町十三　川添はろ子
神田區鈴木町二、東洋内科醫院内　河野もゝよ子
芝區高輪南町四十七　金原てい子
日本橋濱町一ノ一　加藤えん子
小石川原町三一　川村くら子

よノ部

芝區元高輪六十　吉原よね子
京橋區南鍋町二ノ五　米津たか子
麻布區新龍土町十二　吉原かや子
牛込區西大久保村四百六十　與倉幹子
牛込區市ヶ谷谷町十一　依田豐陽子
麹町區上二番町　米井鶴松子
北豐島郡日暮里村字金杉二一二　吉川廣子
牛込區新小川町一ノ五　吉野梅子
麻布區宮村町六十七　芳川新子
小石川區音羽養生所内　吉見しん子

たノ部

麹町區永田町二ノ七　高島つろ子
本郷區西片町十、へノ十六　田口つろ子
神田區北甲賀町八　田村てう子
京橋區南小田原町四ノ六　高橋淸子
神田區今川小路一ノ五　田中こう子
牛込區納戸町二十六　高山さき子
小石川區西原町二ノ十五　田中てろ子
神田區淡路町二ノ九宮本方　丹治作子
赤坂區青山南町六ノ八十二　武富すみ子
本郷區西片町十、ろノ二十四號　竹村てい子
本郷區西片町十、にノ三十九　高倉つな子
小石川區關口臺町　高田藤子
麻布區東町二二　玉木とよ子
本郷湯島天神町一ノ二十四　高橋姿子
牛込區船河原町十三　高木やす子
日本橋區本銀町四ノ九　高木こう子
牛込區若宮町三十七　武田かね子
淺草區聖天町六十一丹陽方　多田銈子
神田區鈴木町十二　高田てろ子
下谷區谷中眞鍋町一　武田なか子

京橋區本材木町三ノ十一　高岡藤子
京橋區南鍋町一ノ一　田中十世子
日本橋區坂本町十四　田尻くめ子
赤坂區青山南町六ノ十四　多々良とよ子

そノ部

四谷區内藤新宿北裏町八十二　曽田八重子

つノ部

麹町區富士見町五ノ九　佃うめ子
牛込區辨天町四ノ十四　鶴見千代子
牛込區通寺町三九　塚原梅子
小石川區久堅町八十　塚本浪子
日本橋區通四丁目七　津村文子

なノ部

赤坂區青山南町六ノ四七　内藤うめ子
牛込區辨天町六十七　南部榮子
芝區新門前町四　内藤千代子
日本橋區新衛門町　瀧川米子
東京巣鴨病院内　永松あい子
小石川區小日向臺町三丁目　南部きし子
神田區元岩井町二十八　長本つた子
芝區新堀町三　中山貞子
芝區愛宕町二ノ十四　中山つれ子
芝區烏森町五　中澤春子
本郷區御茶ノ水女子高等師範學校附屬小學校内　南部順子
神田區亀作町七　中川ふみ子
本郷區菊坂町女子美術學校寄宿舎　中村さは子

むノ部

小石川區同心町二六　村山ふく子
牛込區市ヶ谷仲ノ町　村木きくゐ子
神田區南甲賀町九　室賀歌子

うノ部

京橋區釆女町三十六　浦島てい子
日本橋區通四丁目　牛山竹代子
神田區東紅梅町十三　内田すま子
麹町區三番町　子爵夫人　裏松千代子
京橋區銀座三丁目十九　植木ゆき子
牛込區鷹匠町六　馬屋原ひさ子
牛込區原町二ノ七一　馬屋原いつ子

のノ部

四谷區信濃町八　野崎わか子

くノ部

小石川區金富町三十五　久保田八重子
麹町區飯田町三ノ四　熊澤しま子
麻布町笄町七十九　日下部政子
四谷區鹽町一ノ三　黒田こと子
麹町區飯田町二丁目　桑原春子
牛込區東五軒町十一　久保田靜子
赤坂區臺町六十三　楠田ひで子

やノ部

牛込區市ヶ谷富久町百二十六　男爵夫人　安保よね子
四谷區本村町三十七　山上よし子
芝區本芝三丁目十五　山岡せい子
赤坂區霊南坂町二十　山際はる子
芝區田町四ノ六　山田くめ子

麴町區上二番町三十三　矢島かち子
牛込區宮久町百二十六　安保採子
芝區白金三光町四六二　矢野ふみ子
牛込區拂方町十一　山田拾子
赤坂區丹後町一、二十五號　山崎菅雄子
赤坂區新町三ノ十八　山崎しん子
赤坂區青山南町一ノ三十三　安田定子
牛込區東五軒町五四　矢作てつ子
麻布區我善坊三七　矢島たみ子
牛込區早稻田鶴卷町　山尾うら子

まノ部

芝區三田三ノ十四　松山信子
本鄕區西片町十ほノ二十四　丸茂むれ子
芝區櫻川町十　牧かれ子
赤坂區青山南町六ノ三十一　増野寧子
芝町三田一ノ二十八　伯爵夫人　松方政子
神田區北神保町十八　馬島閑子
本鄕區西片町十ノ二　又木きく子
小石川區久堅町七十一　牧野英子
日本橋區新材木町十四、松下岩雄方　松下つれ子
芝區汐留町官舍　松野蕭子
本鄕區二丁目九　前島けい子
芝區金杉新濱町一　前田濱江子
赤坂區青山南町大ノ一〇一　松下貞子
本鄕區龍岡町八　松平八百子
赤坂區青山南町五ノ四五はノ二六　町田まつ子
牛込區矢來町四ノ二四　正木いく子
芝區高輪南町四七　松原とよ子
麻布區第三高等女學校職員茶話會　丸山丈子
本鄕區西片町十はノ十　眞水定子

ふノ部

麴町區飯田町一ノ八　船曳みき子
麻布區東町二十四　藤岡千勢子
府下淀橋町大字角筈新町一八五　福羽てい子
芝區芝公園六號ノ四　藤井すゞ子
麻布區笄町百二十九　福永淺子
麴町區一番町三十九　福島多喜子
赤坂區青山南町六ノ十二　藤野菊枝子
麴町區永田町二ノ一鍋島邸內　古川喜代子
小石川區丸山町十九　古谷楊子
小石川區諏訪町三十六　藤澤すま子
深川區鶴歩町三秋田村木商會　府川ちよの子
神田區豐島町二十一　藤井千代子

こノ部

神田區駿河臺南甲賀町八　後閑菊野子
本鄕區西片町十、はノ二十四號　近藤幸子
本鄕區湯島五ノ十、順天堂病院　後藤米子
麴町區富士見町五ノ二一　小宮せん子
本鄕區彌生町二　後藤わか子
牛込區若松町一五〇　小西せん子

えノ部

牛込區赤坂下町五十三　江口春子

てノ部

小石川區豐川町二十四　寺田恒子

あノ部

牛込區納戶町三十一　青戶咲子
牛込區天神町七十一　青木すみ子

牛込區市谷加賀町二ノ二十　安藤さく子
麻布區東鳥居坂町十　麻生富久子
淺草區平右衛門町二十一　相坂喜美子
京橋區南新堀町十一　大田鶴子
麹町區下六番町四十八　淺田みれ子
神田區猿樂町十九大關方　朝倉ふみ子
本鄕區駒込丸山町二一　吾妻光子
神田區西小川町二ノ五　阿部さだ子

さノ部

麹町區三番町三十二　榊賀子
本鄕區駒込二百三十二　佐藤靜子
小石川區白山御殿町百九　齋藤竹子
麻布區市兵衛町二ノ八十八　西鄕信子
四谷區左門町五　佐伯みつ子
麹町區土手三番町三十三　佐伯すみ子
麹町區富士見町六ノ十　坂井その子
芝區新幸町將六今井方　齋藤せん子
牛込區築土前町十二　齋藤喜代子
牛込區矢來町四ノ四兵頭方　櫻井かほる子
本鄕區根津宮永町三十五・齋藤政一方　櫻井みち子
麹町區内幸町一ノ五　坂水操子
豐多摩郡千駄ヶ谷字新田八三四　佐野貴見子
赤坂區氷川町五十二　酒井邦子
下谷區二長町五十二　莊生たに子
麻布區狸穴町四十　佐藤澄子
芝區高輪南町三十　崎川つる子
麹町區上二番町四十　指宿廣子

きノ部

府下駒場農科大學官舍　喜多山つせ子

赤坂區青山南町六ノ五一　北原喜子
牛込區大久保餘丁八二　行山秀子

みノ部

府下千駄ヶ谷村七百六十二　三島わか子
小石川區竹早町八十二　三浦とめ子
麹町區下六番町五二　三浦とき子
麹町區内幸町一ノ三　三島千代子
芝區明舟町十二　宮崎篤子
神田區猿樂町十二　水原はる子
日本橋區久松町二十九　宮田ちか子
麻布區芝森元町一ノ二十七　水原きん子
神町區今川小路二ノ十四　三好初乃子

しノ部

牛込區南町一　島崎たけ子
深川區安宅町七　島田やえ子
小石川區原町一一五　島田濱子
牛込區砂土原町三ノ十六　鯛田てる子
麹町區紀尾井町六　白井きん子
芝區松本町十四　下村ちと子
芝區巴町三十四　篠原さだ子
小石川區白山御殿町百十　下瀬勝千代子
下谷區西黒門町十一、金門尙合　十文字こと子
牛込區西五軒町十八　柴田れん子
小石川區久堅町七四　篠田ふみ子
下谷區御徒町一ノ二五　篠やえ子

ひノ部

麹町區三番町六十　廣瀬りき子
赤坂區青山南町六ノ五十一　菱田糸子

もノ部

牛込區上宮比町五 森安かた子
麻布區本村町一二〇上田方 森　閑子
本所區綠町一ノ四十四、關口方 木島鐘子
京橋區南金六町十五 森永とく子
牛込區宮久町十九 森　君子
牛込區早稻田鶴卷町四百三十一 森山波子

せノ部

神田區駿河臺西紅梅町十六 瀬川すゞ子
小石區音羽養生所内 芹澤かつ子
麻布區一本木二十二 關　邦子
麴町區上六番町三十 瀬川さわ子
牛込區市谷仲町三四 關　計無子
豐多摩郡千駄谷村三八四 仙渡佐嘉子
小石川區水道町五二 仙田花子

すノ部

神田區北神保町八 鈴木みち子
本鄉區駒込病院内 杉本りせ子
府下龜戸町三九〇一 鈴木きよ子
神田區今川小路三ノ八 須藤鳳子
麴町區永田町二ノ三十 杉山猷子
本所區小梅町一八九 鈴木鈴子
下谷區北大門町十六 鈴木うめ子
小石川區音羽養生所内 鈴木らく子
神田區西小川町五 鈴木百子
四谷區左門町八九中山方 杉本濟英子

○東京帝國大學附屬醫院

第一醫院入澤内科 井野はま子
第一醫院近藤外科 山田やえ子
講習生寄宿舍 村井ちか子

地方會員ノ部

○本會贊成員（本會に於て講演又は執筆せられし諸氏）

横濱市南太田町 醫學士 渡邊房吉
府下巣鴨村一八二八 醫學士 栗本庸勝
大連 ドクトル 佐藤運雄
醫學博士 伊東祐彦
醫學博士 伊藤準三
秋田縣小坂鑛山病院 醫學士 米山彦太郎
横濱 ドクトル 朝山義六
福岡醫科大學教授 醫學博士 櫻井恒次郎
府下品川大横町 齋藤清文
熊本、ミスリデル 醫學博士 島村俊一
福岡醫科大學教授 醫學博士 榊保三郎
福岡醫科大學教授 醫學博士 久保猪之吉
濟國大連近江町區一町 田中德三郎
栃木縣河内郡姿川村字鷺谷五 坪山平馬
福井縣武生郡蓬萊病院 新田宗太郎
岡山縣御野郡大野村大安寺千百七十六 山川存二
京都市烏丸通上長者町角 ドクトル 佐伯理一郎
新潟縣佐渡夷町 醫學士 竹中成憲
廣島市字中島本町九十一 小泉貫
府下入新井村山王二五七八 小高眞造
三重縣志摩郡磯部村 杉山繁
甲府市代官町四五 醫學士 淺田決
秋田縣鹿角郡毛馬内町 小笠原秀治
青森縣西津輕郡鰺ヶ澤町七ツ石町四番戸 藤田眞雄
新潟縣東頸城郡浦田村大字浦田十八 本山捨五郎

埼玉縣浦和高等女學校　坂本勝藏
臺灣打狗新濱街　今井武夫
臺灣鳳山西門街　相澤常太郎
富山市赤十字支部病院内　醫學士　澤崎寛制
相州小田原十字町三ノ七〇八　醫學博士　能勢靜太
大阪市西區立賣堀阿波橋高松方　阿部文五郎
京城大和町二ノ四十　河野衛
千葉縣下國府臺衛戍病院　横井忠國
青森縣三戸郡八戸朔日町　種市貫一
臺南市西本願寺布教所　能美斷正
福島縣信夫郡瀬上町　鈴木一衛
徳島市富田浦町字中野　江口又衛
徳島市徳島町字厩町　高島一男
徳島市寺島町　賀川一郎

○終身會員

神奈川縣中郡大磯町　川村春子
山形縣西村山郡新宿村　今井政の子
山形縣東置賜郡屋代村大字竹森六百二　長谷川伊勢子
水戸市上市泉町三　加納はま子
山口縣山口町字野々村古熊十二　勝間田千代子
大阪三軒屋町紡績會社　山邊さだ子
愛知縣西春日井郡山田村字中春日井　松澤たつ子
神奈川縣大綱山　高島くら子
大和國生駒郡法隆寺村百六十三　北畠三枝子
福島縣福島町　油井なか子
仙臺市本荒町四　椿高子
東海道大磯停車場別莊　西升子
府下北品川御殿山二八七　驪原千代子
長野縣飯田町　勅使河原花惠子
府下入新井村一五五〇　玉塚とよ子

埼玉縣北葛飾郡櫻田村字八甫　渡邊麗子
埼玉縣北葛飾郡幸島村大字下片川十九　山中てる子
横濱市南太田町　荻原濱子
高知市帯屋町郡役所前　小松雪子
北海道渡島國福山町大字神明町廿一　松前藤子
兵庫縣武庫郡御影町内ノ郡家一三六字寺前　中村久貞子
清國厦門　直哉夫人　愛久澤備子
千葉縣市川町字根本二二三七　横井ひで子

○特別會員

臺灣嘉義廳官舍　津田貞子
北海道函館惠比須町七　藤野くら子
愛知縣豐橋市指笠町卅五　飯田たづ子
甲府市百石町三三〇　川上きん子
府下豐多摩郡中澁谷七五　宮岡ふみ子
横濱市元濱町一ノ一　渡邊たま子
栃木縣下都賀郡皆川村　幸島菊子
千葉縣東葛飾郡市川町字市川新田四　田間よし子
和歌山縣海草郡有功村　川口直子
兵庫縣武庫郡鳴尾村鳴尾　辰馬清子
神奈川縣鶴見仲ノ町五五七　小川孝子
福岡市外東公園内　久保よりえ子
神奈川縣子安村字子安　守屋千代子
滿洲大連兒玉町八　久保田不二子
臺北西門外街二ノ十五　渡邊はろ子
福岡縣福岡市船津町三十四ノ二　榊梅子
大阪市北區網島町　藤川富子
大阪市北區大縞橋通三丁目十番邸　石田裕子
兵庫縣赤穂町　加藤雛子
横濱市西平沼　平沼文子
横濱市南太田町一九六七　遠藤錠子

府下澁谷村南平臺五〇六　內田陽子
府下入新井村不入斗三四六　中野嘉代子
神戸市奥平野村字天王二九七ノ二　植田しげ子
府下下戸塚元高田馬場　相馬光子
府下中澁谷三〇九　曾根しん子
大森荒井宿ニテ　男爵夫人　西靜子

○通常會員

いノ部

沖繩縣那覇久茂地　伊藤いす
金澤市上柿木島二十　岩田たき子
大阪府濱寺石神醫院　石神八重子
沖繩縣那覇東池上醫院　池上靜子
愛知縣碧海郡菊谷　板倉はま子
豐後國大分備揚町百十四　犬塚ゑみ子
高知縣安藝郡川北村　岩村玉子
長崎市出來大工町十六　飯田和香子
奈良市東寺林町十八　磯田梅代子
鳥取市御弓町　伊垣かう子
石狩國樺戸郡月形村官舍　五十嵐安子
府下北品川字一本木四一八　伊澤ひさ子
愛媛縣松山市柳井町六十三　伊藤ちよう子
埼玉縣浦和町六十五　飯尾たつ子
長野市石堂町七十六　石川露美子
北海道天鹽國留萌郡大和田炭山池田鑛泉病院　池田かつ子
信州諏訪郡立高島病院豐田分院內　井上しげ子
府下荏原郡目黑村目黑坂下一五六　岩永さと子

はノ部

沖繩縣那覇區泉崎町　春田いろ子
埼玉縣兒玉郡長幡村　馬場たつ子
京都府新舞鶴余部官舍一〇四　芳賀きた子
松山市大字三番町　早水まさ子
山形市旅籠町四八四　服部さき子
滿洲大連大神町　服部仲子
廣島市竹屋町二十三　林久滿子
府下荏原郡目黑ビール會社構內　橋本眞津子
府下下澁谷伊達跡一八二五　服部繁子
大連南滿洲鐵道會社々宅　服部鐐子
德島市宮田浦町字幟町　服部とみ子
横濱市住吉町五ノ六五　橋本かれ子
府下入新井村新井宿根岸一四八　橋本とよ子
臺北南門外龍匣口庄一七〇　速水ゑい子
函館高等女學校　校友會

にノ部

横濱市神奈川青木元町高木山　丹羽賀子
清國漢口大冶鐵山　西澤好子
山形縣酒田本町四丁目　西川なか代子
千葉縣東葛飾郡福田村木野崎　西山ひろ子

ほノ部

府下南品川四丁目四〇五　本田つさ子
北海道札幌町北三、東一、二　本間せい子
京都市土手町通竹屋町　細木とみ子
北海道小樽區稻穗町二十三　本間れん子
那覇區泉崎　堀內おや子

へノ部

北米シヤトル市ワシントン街七〇九　別府さわ子

こノ部

北海道石狩國空知郡幌內炭山社宅　戸川祝子

京都市吉田町中大路　宮田たま子
南多摩郡八王子町本町四十六　宮澤れん子
東京府下小笠原島母島沖村　篤志看護婦人會
山口縣立高等女學校寄宿舍　徳宮ふじ子
山口縣防府町字宮市　徳本さだ子
府下中野大字中野字桃園三三三〇　戸塚てつ子
沖縄縣那覇松尾山　徳田松子
沖縄縣那覇東　宮永おと子
沖縄縣那覇西一四八　渡慶次靜子

ちノ部

鳥取市中町四十九　千葉あや子
臺灣臺南衛戍病院前官舍　近岡千代の子

お、をノ部

大阪府泉北郡濱寺公園前　岡田美禰子
仙臺市片平町五七　大井上とし子
相州小田原十字三ノ七三〇　大木珠子
相州鎌倉雪ノ下　小倉すゞ子
赤坂區青山原宿一七一　大槻晴子
府下入新井町字山王二六八三　岡　宮子
福岡市立小倉病院　大村やす子
秋田縣平鹿郡川西村十日町　太田千代子
府下千駄谷町八三八　奥田綾野子
沖縄縣那覇久米　大久保はな子
廣島市竹屋町六四渡邊方　小貫しく子
松山市本町三丁目　岡　しと子
廣島市竹屋村四百五十四　奥平一子
府下豊多摩郡千駄谷村八九〇　大迫隆子
府下北品川御殿町七三三　小田切桂子
伊豆國三宅島神著村二十五　小野すゞ子
佐賀縣西松浦郡伊萬里今町　沖田あい子
呉市川原石一〇四五ノ一　大館きみ子
府下八王寺町八日六十六　大野みち子
上野國碓氷郡里見村大字上里見村二十八　岡田ゑい子
十勝國帶廣町字西二條通四丁目　大井上よれを子
千葉縣東葛飾郡野田町大字上花輪七百七　大塚さく子
北海道札幌區大通西六ノ十　大澤すゑ子
府下西大久保村字北裏九五　太田しと子
臺灣恆春廳官舍　小山榮枝子
沖縄縣那覇久米　小野孝子

わノ部

福岡縣久留米市外梅満　渡邊正能子
神戸市山本通五ノ七十九　和久山きそ子
岩代國河沼郡野澤村　渡邊同子
北海道函館會所町八　渡邊夏子

かノ部

秋田縣小坂鑛山醫院分院内　河野りつ子
久留米市日吉町四一　鹿兒島きゝ子
千葉縣安房郡平群村平久里中一三五六、和田方　川名茂登子
神戸市葺合町字熊内二〇八九　勝田久米子
府下荏原郡大崎村大字上大崎今里八百五　河井里代子
千葉縣長生郡茂原町早野新米　加藤彌慈子
富山縣氷見町大字御堂町二九　上庄とみ子
廣島市上流川町廣島女學校内　上甲玉代子
宮城縣登米郡石越村金茂之丞方　金　たま子
栃木縣芳賀郡茂木町二百　米岡ちか子
甲府市百石町六九　白坂きく子
北見國雄武小樽木材會社　河野みき子
青森縣大湊要港部官舍　上泉ひさ子

沖縄縣那覇區松尾山官舎　加藤あさ子
佐賀縣東松浦郡唐津高等女學校　校友會
徳島市通町一丁目　門田かた子
山梨縣南都留郡小立村賀司病院内　梶原里子

よノ部

秋田縣北秋田郡大館町　横山壽子
隠岐國西郷町第二號官舎　吉富霜子
福岡縣鞍手郡直方町　横倉熙子
府下荏原郡大崎鞍字谷山二四九　米倉芳子
熊本縣鹿本郡來民町一五二一　米原とき子
筑前國若松町大字修多羅山手通二丁目住友社宅　吉田小枝子
大連市濱町十三ノ一　吉野伸子
秋田縣鹿角郡大湯村　吉田とく子

たノ部

沖縄縣那覇泉崎　田尻八重子
沖縄縣那覇立井病院　立井翠子
大阪市東區岡山町三六一　田中かま子
神奈川縣小田原十字町四ノ八八七　俵つれ子
岩手縣盛岡高等農林學校　玉利わか子
大阪市外海老江村七九　瀧川みち子
愛知縣丹羽郡高雄村百五十七　高木英子
府下新宿停車場前　田邊いと子
臺南市荏雅橋街官舎　竹下梅子
沖縄縣那覇久米　種子田のし子
沖縄縣那覇東一五四一　田中芳子
岩手縣稗貫郡花巻川口町五五三　高橋只志子
廣島市鐵砲町一七七　田中直子
福岡縣早良郡鳥飼村大字谷　大府てつ子
廣島縣呉市八幡道三三四、三上兵吉方　谷口駒子

福岡市下土居町二十六　武内つね子
埼玉縣浦和町四百三十五　田中こう子
高知市中島町二百九十　武田と喜子
伊豫國松山市港町四ノ三十六　高田直子
青森三戸郡三戸町　田島ちやう子
伊豫國西條町明屋敷　阿藤ちゑ子
鳥取市西町　高松那嘉子

れノ部

秋田縣秋田郡潟西村宮澤村笹川氏方　竹根きみ子
和歌山縣師範學校女子部　竹野菊江子
愛媛縣別子山村字中七番五五五　染矢ひで子

つノ部

京城大和町一ノ十七　土屋西子
京都市上京區東入三本丸太町上ル　土居存子
岡山市南方町五五八　角田つね子

ねノ部

長野縣上水内郡三水村　禰津せい子

なノ部

徳島市寺島町字本町　中川きく子
沖縄縣那覇泉崎　中川しい子
神戸市山本通五ノ七二ノ二湯浅方　中田定代子
名古屋市東區　名古屋裁縫女學校
臺南市安海街内二七〇南部治療院　南部好子
臺灣臺北西門街二丁目臺灣銀行内　長尾せい子
大阪市南區天王寺悲田院町三八四七　中橋ゑつ子
南豊島郡澁谷村元中澁谷四十　長森ひで子
青森縣三戸郡八戸町八幡町　南部とし子

鎌倉長谷吉田別宅　中濱千代子
清國上海兆豐路二十八　長門久壽子
甲府市綠町四十　内藤喜千彌子
秋田縣雄勝郡貝澤村　中川房子
山口縣佐波郡三田尻毛利家邸内　長井貞子
秋田縣鹿角郡毛馬内町　中津山きよ子
神戸市山本通四ノ百三十二　楢崎竹子
府下南品川百五十四　南條榮子
兵庫縣揖保郡龍野町ノ内日山村　中原百合子
和歌山縣西牟婁郡田邊町字榮町南新町　那須よし枝子
岐阜縣武儀郡富田町　長尾愛子
大和國添上郡帶解村大字池田第一番邸　内藤多美子
埼玉縣北足立郡安行村字吉蔵新田　中山せい子

むノ部

廣島縣比婆郡庄原町　村松あさち子
對馬國竹敷要港部官舍府下淀橋町柏木九六一　向山靜子
北海道旭川三條通十三ノ左三　室伏清子
相州平塚停車場南　村井たか子
本所區向島寺島村レンズ製造所　村山すゑ子

うノ部

德島市八百屋町一丁目　上田たけな子
豐橋市東八丁乙八四　内山訓子
大阪市西區江戸堀上通り　植村妙子
松山市一番町私立勝山高等女學校　上野君子
青森縣三戸郡八戸町字八幡町　植村みわ子
府下大久保百人町七九　湊原せい子
吳市和庄町八丁目　植田おさ子

のノ部

岡山縣兒島郡味野村千六百七十二　野崎階子
高知市紺匠町二　野並三種子
大阪市西區船出町一一三七　野口孝子
兵庫縣武庫郡住吉村九十　野口亘子
北海道函館區龜田臨獄二十一號官舍　野田ひで子
沖繩縣首里當藏　野田もと子
埼玉縣比企郡唐子村　野原くま子

くノ部

北海道札幌區北六西一四　久保衣子
高知市中島町二七　黑岩兎志子
山梨縣北都留郡富濱村二六九　黑部はな子
府下駒場農科大學官舍　久保谷子

やノ部

廣島市下柳町七八　山梨識子
沖繩縣那覇久米　山之内卓子
沖繩縣那覇西　藥師つろ子
沖繩縣那覇立井病院　山川うた子
千葉縣市川町三〇五七　安村忠子
府下大久保百人町二四　山内錦子
沖繩縣那覇泊屋宮祖病院　屋宮祖靜子
沖繩縣那覇若狹町山城病院　山城まかく子
沖繩縣那覇東大門前通　山下幸子
千葉縣君津郡木更津北町一三四一　山田千代子
大阪市北區中ノ島玉江町一ノ十二　安永菊子
韓國京城本町九ノ二十ノ二　安田鏗子
臺灣臺北南門外龍匣口庄民政部官舍　山田よね子
大阪市東區北濱四ノ九〇　矢能以滿子
越前國敦賀港宮貫　矢島よね子
長崎市三菱造船所八軒屋社宅　山川小里子
靜岡縣駿東郡清水村伏見佐藤きよ方　山下百合子

北海道札幌區南七、西一、十四　柳橋とや子
府下大森八景坂下　山口静子

まノ部

佐賀縣松浦郡唐津郵便局　松浦磯子
佐賀縣唐津郵便局交換室　松浦その子
北海道札幌區北一西四　馬島つが子
山口縣長府土肥山　松田すゑ子
長崎市引北町十八　毎熊かめ子
神戸市下山手通六ノ百六十三　前川てる子
徳島市八百屋町三　馬詰あさみ子
徳島市福島本町字中町　眞野はな子
陸奥下北郡田名部町　丸山よし子
仙臺市東四番丁十八　松尾多喜子
茨城縣猿島郡古河町石町　丸山よし子
三重縣三重郡羽津村羽津病院内　牧村清子
府下代々幡村二〇五　松浦つる子
岐阜縣安八郡結村大字東結　馬淵秀子
靜岡縣富士郡加島村平垣　松永くに子
府下下大崎一八〇　松波好子
名古屋市中區下前津二六二　槇なみ子
三重縣津市　縣立高等女學校

ふノ部

廣島市平塚町二四三ノ二　深井てる子
北海道函館船見町五十八　深瀬たか子
新潟縣新潟市上大川前通十番町六　藤田りた子
荏原郡南品川淺間臺一四〇七　福島鶴子
名古屋市熱田町東町　深田幸子
山形縣酒田町三六安田銀行内　古澤みね子
府下内藤新宿北町九　藤田さだ子
清國上海日本郵船會社内　深野英子

廣島縣呉市山手通十二ノ一　藤本竹土子
秋田縣雄勝郡三輪村赤袴　藤野しげ子
沖繩縣那覇東　龍道子
靜岡縣沼津千本常盤町東方寺前　福地衣子

こノ部

神奈川縣中郡秦野町二七三七　小清水清子
京都府下伏見稲荷町　郡山やへ子
兵庫縣加東郡市場村　近藤こま子
山口縣豐浦郡西市村西市病院　小林市子
高知市帶屋町　高知病院
埼玉縣北埼玉郡利島村麥倉　小室苗子
臺灣打狗鹽埕埔庄　古賀みち子
埼玉縣北埼玉郡鴻茎村　小坂みね子
沖繩縣那覇[illegible]茂地　小山すゑ子
埼玉縣北埼玉郡三田谷村　腰塚くす子
群馬縣碓氷郡下里見村二三　木暮とせ子

ゑ、えノ部

北海道室蘭港海岸町一　蛯子那珂子
臺灣台南測候所長官舍　遠藤隆子

てノ部

北海道札幌區北一四四北辰病院内　平塚言子

あノ部

北海道札幌區北三、東四　阿部恒子
朝鮮釜山西町二丁目一福亭前　淺海琴子
廣島縣呉市東本通一ノ二十八　天野知惠子
兵庫縣丹波國氷上郡國領村　足立まつ乃子
府下千駄谷町五七九　青戸さく子
千葉縣市川停車場北　天野よし子

京都府　大田郡立高等女學校

さノ部

北海道札幌區北三、東三、五　篠森きく子
長野縣上田町常田町　佐藤たま子
久留米市篠山町三六四　相良濱子
秋田縣小坂鑛山醫院內　佐々木きれ子
沖繩縣那覇松尾山　齋藤たま子
廣島市加治屋町一七五　鮫島よし子
宮崎縣宮崎郡赤江村恒久三六四二　齋藤せい子
相州鎌倉大町一一一六　崎川千代子
府下戶塚村下戶塚二九三　齋藤ます子
臺南市東港街守備隊將校官舍　坂田順子
北海道札幌區　札幌高等女學校々友會

きノ部

和歌山縣海草郡內海村大字鳥居　木村八百代子
兵庫縣明石相生町一五四　岸松子
沖繩縣那覇松尾山　岸本しか子
沖繩縣那覇東　金城貞子
沖繩縣那覇泉崎　金城米子
沖繩縣那覇東　杏はろ子
山口縣三田尻上町　木梨美代子

ゆノ部

相州鎌倉小町四二七　湯地照子
宮城縣伊具郡角田町　湯村きく子

みノ部

群馬縣山田郡桐生町四丁目幸町關根千代方　箕輪なつ子
筑前國嘉穗郡笠松村鯰田炭坑社宅　三浦こま子
横濱市北方町五百五十五　箕輪不二子
相州藤澤大坂町　三留織江子
府下淀橋町柏木字成子一二三　三木梅子
臺灣大目降糖業試驗所　三宅きよ子
臺灣臺北府後街民政部官舍よ號　宮本定子
愛媛縣溫泉郡雄群村字藤原油紙製造所內　宮脇ちよう子
北海道札幌區北一條東二ノ六　宮島梅子
韓國元山津旭町一丁目　宮原いく子
沖繩縣那覇區西一三六六　宮城おと子
臺南市竹口巷街巳二一八　寶田八重子
鹿兒島市高麗町女子技藝學校內　滿田ゆひ子

しノ部

府下大崎村上大崎五五六　島清子
宮城縣加美郡小野田村月崎　宍戸きみよ子
府下澁谷村下澁谷居村三八九　清水とし子
和歌山縣日高郡御防町　驪路とみ枝子
廣島縣佐伯郡二十日市町驛前　新藤いれ子
栃木縣下都賀郡栃木町　白澤彌與司子
相模國小田原十字町三ノ五五四　清水すみえ子
鹿兒島市春日町三十二　篠津治子
岐阜縣山縣郡戶島村側島　篠田しづえ子
肥前國東彼杵郡西大村五百三十五　澁江しづ子
福井縣敦賀町松榮　繁田よし子
青森縣上北郡野野町山田醫院　清水忠子
北海道後志國瀨棚郡瀨棚村會津町　進藤やすよ子
北海道千島國紗那郡留別村　島崎ひさ子

ひノ部

埼玉縣北足立郡戶田村　日坂ふく子
府下千駄谷村八百四　平田とし子

福岡市地形西町三二　廣瀬みれ子
京都下鴨村四十四　久原あき子
靜岡縣女子師範學校内　平林たみ子
布哇國マウイ島ブウチチ樋口貫方　樋口つや子
韓國馬山浦特馬山　弘生二井子
長野縣立高等女學校内　平山禎子

もノ部

府下八王寺區大橫町二十四　杢代こま子

せノ部

神奈川縣鎌倉字長谷四二一　迫水吉子
門司市老松町一月早方　關野秀子

すノ部

山形縣酒田町上臺町鈴木商店内　鈴木よし子
淸國營口正金銀行社宅　杉原昌子
長崎縣西彼杵郡高島炭坑　杉本千世子
秋田縣鹿角郡大湯村　諏訪なみ子
高崎衛戍病院鈴木芳之助方　鈴木貞子

○新潟支會役員及會員姓名

○講師

醫學士　池原康造
醫學士　長谷川寛治
醫學士　前田待三
黑岩福三郎
醫學博士　澤田敬義
醫學士　工藤秀一郎
醫學士　竹山政男
醫學士　布川興策
長井千尋
醫學士　若杉喜三郎
長谷川一證

○顧問

高橋辰五郎

○役員

會長　竹山れつ子　副會員　關やす子
幹事　中村しげ子　同　古閑はつせ子
同　淸水くり子　同　高橋ただ子
評議員　櫻井うめ子　同　若杉きく子
同　鍵富かう子　同　吉村きよ子
同　荒川てい子　同　坂本いち子
同　澤田いつ子　同　八木ゑい子
同　鍵富しん子　同　高橋なみ子
同　鏡淵りう子　同　松野直子

○終身會員

鍵富せつ子　鍵富かう子　古閑はつせ子
小出てい子　鈴木さだ子

○特別會員

保倉ちよ子　坂本いち子　布川ます子
吉田きん子　松野なほ子　江口みつ子
長谷川まち子　池原つぐ子　高橋なみ子
三池とみ子　松本みき枝子　鳥居みさを子
高橋ただ子　坂口あさ子　笹村えい子
番場ちよの子　長谷川じゆん子　高橋さだ子

長谷川うた子　荒川てい子　齋藤かう子
齋藤らく子　淸水くり子　前田むつ子
櫻井うめ子　中村しげ子　澤田いつ子
若杉きく子　鍵宮とき子　竹山れつ子
八木ゑい子　關やす子　鈴木とめ子
家坂りやう子　淸水なみ子　齋藤あい子
安盛かうの子　黑田うめ子　山田いち子
深町さきを子　鍵宮てい子　林つま子
高山もつ子　青木操子　布川いち子
蒲原かの子
池田よれ子　山口きよ子　市島じゆん子

○通常會員

岩淵せい子　吉村きよ子　高田せん子
松井ふで子　竹内たけ子　篠原きし子
小林うめ子　行形いき子　金井そめ子
長井さと子　齋藤たま子　工藤せい子
阿部きく子　淸水とよ子　和田ゆき子
金卷とや子　佐藤しん子　齋藤きく子
鍋谷きな子　木野井ゆきの子　館れい子
大橋とし子　志賀ちゑ子　白勢はな子
村山のぶ子　鋭淵りう子　竹内かう子
石山りん子　中野せき子　中山とう子
會津やす子　青山つれ子　齋藤せき子
齋藤まつ子　齋藤まさ子　小澤たけ子
丹羽みす子　渡邊くら子　木下てつ子
今田きく子　淸水ふみ子　鈴木そで子
富山ちよ子　石崎まつ子　北村きい子
矢野さう子　江口よし子　稻垣あや子
松田じゆん子　田中つま子　高橋小枝子
辻澤まし子　鍵宮がう子　村田みち子

和田以津子　關井じゆ子　山本みす子

○地方部通常會員

石崎はつ子　小島さよ子　和田くに子

○支會員甲ノ部

柄澤より子　塚野まさ子　石橋きし子
長谷川せん子　酒井とよ子　味方あさ子
味方すゑ子　青木しづ子

○支會員乙ノ部

中村ちよ子　尾原きく子　高田つる子
眞部のぶ子　外山やゑ子　小林せい子
遠藤みい子　山口きみ子　宮田こと子

○山形支會會員姓名

會長　馬淵よし子　副會長　新關たん子
幹事　佐柳千代子　同　西山玉子
同　國井よしお子　同　林ちせ子
同　佐藤たみ子　同　友田ため子
評議員　關根たか子　同　中村松代子
同　長谷川ゆう子　同　長谷川ここ子
同　三浦ます子　同　村井せい子
同　淸田千代子　同　西野さだ子
同　稻田小濱子　同　江尻しむ子
同　西野きぬ子　同　河原たね子
同　澤田しず子　同　岸本鐵子
同　三川こう子　同　坂口よし子

同　田尻清子
同　山岸きみ子

○特別會員

馬淵よし子
國井よしお子
佐藤たみ子
長谷川ゆと子
村井こと子
奈良村きく子
清田千代子
菊井信子
永島のぶ子
坂口よし子
河原たれ子
栗田こと子
小關蕗子
本鄉春子
久保清子
津久井幸子

新關たん子
關根たか子
山岸きみ子
三浦ます子
梶田小濱
吉野ふみ子
三川ゆう子
染谷ふさ子
永田かれ子
戸田たき子
久保田つみ子
村井せい子
西山玉子
西野さだ子
岸本鐵子

佐柳千代子
西野きぬ子
長谷川ゆう子
友田ため子
江尻しむ子
塚田きぬ子
澤田しず子
森ちかえ子
五十嵐よしえ子
恒田ひで子
齋藤きち子
小泉こう子
田尻清子
關口よつ子
水谷みつ子

○通常會員

後藤まき子
横山千代子
國井さた子
青山きち子
中村やよ子
林ちせ子
鈴々木みて子
莊司いず子
安井ふく子
野々村さだ子

畔柳きぬ子
樋口さだ子
鈴木ます子
高宮あと子
工藤せい子
佐々木まさ子
德田ゆう子
伊藤たま子
瀨川まき子
高橋せい子

菅井久子
溝尾まさ子
高橋やよ子
細谷わか子
中村松代子
佐藤えん子
勝野せい子
三井のよ子
牧野すき子
齋藤とり子

湖わか子
木俣もと子
高橋ます子
松村いく子
佐藤しげ子
細川さだ子

關口たけ子
佐藤みつ子
長谷部はつ子
山本さた子
須藤とみ子

加藤あき子
中村とき子
關原かめい子
平賀さと子
永井けい子

○宇都宮支會會員姓名

○特別會員

中山笑子
中山菊子
杉谷ひさ子
蠣崎竹代子
松浦うめ子

堀口富子
菊地より子
矢板はま子
岩渕いね子
牧山その子

笠原小常子
古口とみ子
鮫島ふさ子
吉江武子

○通常會員

石田つれ子
佐藤みち子
鈴樹たよ子
松原まさ子
佐久間みの子
猪俣とく子
鳥居くに子
松本とう子
齊羽とし子
小野しげ子
黑川つれ子
山井くま子
行森やすじ子
小林よれ子

福井よし子
山内とく子
菅野はま子
赤坂みつ子
上野かれ子
五十嵐けい子
渡きんじ子
手塚よし子
須田のぶ子
尾島はく子
山口ひで子
小山もと子
和田あい子
佐々木うめ子

須賀ゑい子
中里やす子
長野順子
中宮まさ子
上野たみ子
矢島きん子
増渕なみ子
大島ちか子
小杉ふさ子
入江きく子
村上しん子
本多よれ子
鈴木くめ子

○地方會員

山口きよ子　湯澤きぬ子　町田まち子
久保齋美子　猪俣夏子　田村みほ子
宇野のぶ子　武居つる子　岩下幸子
足利かす子

姓名簿中若し誤謬も有之候はゞ何卒
御一報被下度願上候

新案特許一〇三六二號 衛生的なる改良かもじ發賣



本品の特長

一、根元にコロップを裝置せるにより舊式のもの〻如く硬からず膚ざわり軟らかなり

二、皮膚を摩擦する事少きゆゑ頭のはげる憂なし

三、頭痛癖ある婦人にも用ひて爽快を覺えしむ

四、二百度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髮の傳染病を媒介する憂なし

● 丸髷 金十五錢より金七十五錢迄

● 島田髷 金三十錢より金壹圓五十錢迄

● 銀杏髷 金二十錢より金六十錢迄

● 送料 各八錢

● 諸かもじ製造販賣

東京市神田區豐島町十七番地 【振替貯金口座一八一八八番】

田中金三郎

● 小賣特約店

京橋南傳馬町 大西白牡丹 ｜ 本郷三丁目 兼康 ｜ 淺草駒形 百助 ｜ 淺草駒形 紅勘 ｜ 神田區須田町 三井屋 ｜ 日本橋通二丁 柳屋

特約店

神田區橋本町三丁目 勝本治助

日本橋區田所町廿一 山三商店

同 横山町一丁目 安井治太郎

同 馬喰町三丁目 萬新商店

日本橋區若松町 松葉屋紋太郎

同 横山町一丁目 天野源七

同 馬喰町三丁目 阿部錠

同 橘町四丁目角 島村商店

日本橋馬喰町二丁目 飛川商店

同 横山町二丁目 江川小間物店

同 横山町二丁目 森本支店

外全國到る所の小間物店にあり

原胤昭著　博文館發行　原方にても販賣

母と子

全二册半紙判定價壹圓
郵稅市內四錢地方八錢

△何うしたら子供はよく躾けられるか△

本雜誌の第二百四十四號に子供の心の衞生と題して寄稿したる如く世の母たり姉たる人の必讀の家庭の讀本

婦人衞生會

三月例會は休會致候也

私立大日本婦人衞生會

婦人衞生雜誌代價及廣告料

代價		
一册	定價金貳拾錢	郵稅壹錢
三册（三ヶ月分）	前金郵稅共	金四拾五錢
十二册（一ヶ年分）	前金郵稅共	金壹圓八拾錢

廣告料

一頁六十二行・一行二十三字
一頁 金三圓　半頁 一圓五拾錢
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行十五錢

規定

○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ヶ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ貳拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ

明治四十三年二月十七日印刷
明治四十三年二月二十日發行

東京市本郷區駒込追分町三十番地
編輯者兼發行者　菲司秋次郎

東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地
印刷者　今井甚太郎

東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地
印刷所　杏林舍

東京市麴町區富士見町二丁目三十二番地
發行所　私立大日本婦人衞生會事務所

賣捌所

東京本郷區龍岡町　吐鳳堂
東京市銀座四丁目　東海堂
同市京橋區鈴屋町　眞明堂
同市本郷區本富士町　明文館
同市同區春木町　南江堂支店
京都市寺町二條南入　若林茂一郎
東京市日本橋區吳服町　北隆館
同市神田區表神保町　東京堂
同市本郷區本富士町　盛春堂
名古屋市本町三丁目　丸善書店